鉄槌 一

内閣文庫
和書 類 號 冊 函 架

内閣文庫
番號 和 18703
冊數 4 (1)
函號 203 129

203-129

国立公文書館
National Archives of Japan

つれ〳〵草　徒然と云さびしき義なりつれ〳〵草と云事のなぐさみ
日ぐらし　ひぐらしとは終日の事の心詞也
おそきところ
すゞりにむかひ　何ともなき所
あそびハ
心にうつりゆく　心ハ鏡のごとく万境にうつり来ると云本説あり
よしなしごと　由来なきこと
そこはかとなく　そこはかとなき助語也
[illegible]
ものぐるほしけれ　謙退辞也
これはつれ〳〵草の序也
いでや　発語のことば也

つれ〳〵なるまゝに日ぐらしすゞりにむかひて心にうつりゆくよしなしごとをそこはかとなくかきつくれば。あやしうこそものぐるほしけれ。いでや此世に生まれてハ願はしかるべきことこそおほかめれ。御かどの御くらゐ

いともかしこし
けおそろしきまでかしこき事をいふ也 宸襟不畏と
かしこくうるはしき事をいふ也
竹の園生のすゑ葉まで
竹園とは親王の御事也 皇孫乃
末々までいふ也
人間の種ならぬぞ
此花是非人間種再養平臺
一片霞此花是非人間種
瓊樹枝頭第二花と云詩 親王
の事也
やんごとなき やむことなき事
あり無止とかくなる也
一の人 摂政関白をいふ也
職原鈔曰執柄必蒙一座之
宣旨故称一人
さらなり 猶更の事也
たゞ人 摂家の外は皆たゞ人
なりされどもその子孫までは
はふれにたれどもなほなまめかしとある

いともかしこし。竹のそ
のふの末葉まで人間
の種ならぬぞやんご
となき。一の人の御有
様はさら也。たゞ
人も舎人など給はり
ぬる際はゆゝしとみ
ゆ。その子むまごまでは
はふれにたれどなほ
なまめかし。それより下つ

舎人は羽林家の中少将とさして
すゝめ侍り
とねり 近衛の舎人は随身
也それとなく府の随身といへる
ゆゑにこれを舎人とも号する
事か 随身は家によりて
こふれ 舎人つきたる家
身へもそへつかはさるゝ
つねのまへにはふるとおもふべく
なまめかし やさしきさま
時のほどよりさきにそのいきほひ
あるにもおなじく一とき
それより下つかたは又従六位
などの人をさしてかたちにいふ
べし
清少納言 肥後守清原元輔が
むすめ一條院の皇后に仕へ
し女房なり
いきほひまうにのゝしりたる
ものは権の子のつかさ

かたはほどにつけつゝ。
時にあひしたり顔
なるも、身づからはいみじ
と思ふらめど、いと口おし。法
師ばかりうらやましから
ぬものはあらじ。人には
木のはしのやうに思はる
るよと。清少納言がかけ
るもげにさることぞか
し。いきほひまうにのゝ

字之時よあひくツせいある
んなり
増賀ひじりは　平安城人諌議大夫橘恒平カ之子也和州多武峯の僧也撰集抄ニ詳也又元亨釈書ニ傳アリ
ひたふるは　ひたすらの義之一向
と云り
みやうもんは[illegible]
[illegible]
あいさやう　愛敬と云也

しりたるにつけて、いみじとは見えず。増賀ひじりのいひけんやうに、名聞ぐるしく、仏の御をしへにたがふらんとぞおぼゆる。ひたふるの世捨人は中々あらまほしきかたもありなん。人はかたちありさまのすぐれたらんこそあらまほしかるべけれ。

かくうしとみる人の[illegible]
云ゝ多くあるを愛敬の心を云之
本性　生まれつきの天性之

物うちいひたるきゝにくからず、あいきやうありてことばおほからぬこそあかずむかはまほしけれ。めでたしと見る人の心おとりせらるゝ本性見えんこそ口おしかるべけれ。しなかたちこそ生まれつきたらめ、

しなかたちと云ことを評論
[illegible]所詮人ゝ帰もろ義
之三十男唯一心の文ニお叶う
[illegible]頻ニ揚色ヲ
[illegible]
さしなく　孟子也
[illegible]日本記大夫以上
各々有座降ジヤガウ　シナクタリ

心はなどかかしこきよりかしこきにもうつさばうつらざらん。かたち心ざまよき人もざえなくなりぬれば、しなくだり

りを度量ちらぬ云々
かりくさまれかおんよ
色立ほしつきくべしけをと
もとをさくしてかいちさこわさちれおかもさき
文の人　漢字草の文之
云々　北肉やけとくくさり
禁中のまつりことあるも
人の鏡　唐書ニ魏徴薨太宗臨テ
朝ニ歎シテ曰以テ銅ヲ為ス鑑ト可シ以テ正ス衣冠ヲ
以テ古ヲ為ス鑑ト可シ以テ知ル興替ヲ以テ人ヲ為ス
鑑ト可シ以テ明ス得失ヲ朕常ニ保テ此三ノ鑑ヲ
内防ク己カ過チヲ今魏徴逝ス一鑑
亡ス矣
そのハ由こしさ文の人
作文和云の管絃以及ぷえ
有識よ公ゆのうさんへの
鏡ちすんへそえぱこしか
へうれぱよろごつこぢ
そしつもりさ　真ハ衣冠にさ所
打ハおりく所等ハ人のそしる所
そしつそう兄数打りして
於于とりぱ夜しらみすなとのうけとちまね

いみしへのひしきの代　むかし
しまくへ尭舜文武日本ニ
てハ延喜天暦の帝とやくへ
さう　鏡の事　花藤なる
とこうせいさ　所独とりく　など
つこうなる所へ
ありまとうろうまく　皆ひつきなる
さんふよくかうれ茶之
衣冠　むより九条殿の御辞
あまさこ
こそおのこハよろれ
古の聖の御代の政をも
忌れ民の愁ひのそしをお
ちうとも太りて万り
さうしとつりてしし
とひさうそ兄こ和
うろへそうくそ云和
ちくみなきぱ衣冠よ
里ま市にいてるとき
まよ太うひく用よぱ花麗とさとしする

よきかれとて九条殿の誡ことを作る

九條殿　右丞相師輔公の作
一巻あり

順徳院の禁中抄

順徳院　人皇八十四代後鳥
羽院第三ノ皇子禁秘抄一
巻あり禁中の事を記し給ふ
事

とくりて世話へあきまじれ

はやものなつきあめのへを

はやけのなつきあり
くるりのこ公の事と坐かやけ
とよめりし又天事をゆきて
かやけしくよめりし

みやくさく

うそうちなをとおつくよ

しとをくこそ備まし

万よいうしくどもえて

さうくお　窮寞とうまうさ
ひしきをとこおくへしし
こうねんちうし
あのさうつきのそくろうき

のまさらん男いてしさう

くしまちの危乃底ろき

玉巵無当（玉巵無當）雖華無實　當ハ
底也

からそすへきこ霜

おのれくおさくめ
これをは仏来の遺
あつさこそるるさ
こうきくうろくま松のひみさく
や八重桜よとすうも

をぬきくひおりさし親の
いふめ世のえしつしとそい
ひまふのいと侮うくあよ
さえうきしまうひみてまし

あきしとまこ人
えりとてとされへそりかくをとも
まいはあつひもしとあさき落
おとしきくる

おしくまきやさしきころ
かかくる翅く
さあへひとわねりらよ

まくろひ知ちきこそ

ひさすり
たえまし　ひとへうり
風流とも狂ともか
ろふし
れかまとも人はえとも是をを
これをくすらおそのくりまと

あしくまきころしとて

ひさそしたはまこさうさ

よへおそて。女よさやまと

桂のまへハ恐入はべりて　昔ハくらゐ坐せハまうんこそあ
いつまでの人かつかたとかくべき　らまえりしかゝへこさわさ
るれ
此の世外事　此殿も伝之
源氏の物語にあるかしれとひ　後の世のことしらせやつと
金しおの三ヶ條に書るのお　まます紫式部ろうしかつ
らまかしきことをひつかし
うのくんよろしは世のつゞけ　ぬんつかうし
由ちことを得べし
不意　さいふいろく心よあるな　紫筆に捻ゑよきてあなん
ならるべし
ふつゝ　じやしき事く　のりしられたるしすもぶろ
はかまえひとつまへうつろ六
まろことをみく　世よりとひ　おしてあなかくるれかよ
みかうさ之外を孫りありの事

まつとあって
さるかくにあるまかりしやましき　門さしこあく諸しまする。
ちくはおふさりかりしさ之　御しうしさなかさるかつ
頭基中納言　西宮左大臣高
明公の孫大納言俊賢卿の　よあし由りし。紫式部の中
丁男之
配所　流罪左遷の人乃わか　納言のむひろん所不知月
不く　つくろうてうなんしとさを
栄しめへし
前中書王　中務兼明親王延　錦刀の殿んしかりんよ
喜の御子之為文殊乃人也　とまりて救すうさんよ
九條太政大臣　伊通公也
花園左大臣　御仁公也後　色。平よりありのまくてお
三条院孫帰化親王の御子之
そう　曽の子之子孫とゆふ曽
重也自曽祖至孤一雖皆得　つしるん前中書王九條を
称曽孫

深草のみかど　太政大臣良房
諡ハ忠仁公深草のきさきの
父清和天皇の外祖父也　一に大鏡
世継の翁の物語
ところく夜にる業没え労乾
御や文徳天皇より後一条院
まで十四代百七十五年帝王
太臣のりとあるなり

聖徳太子　用明天皇ノ御子
也平氏ガ聖徳太子傳暦ニ曰ク
太子三タヒ廻ル御陵ヲ勅シテ墓工ニ曰ク汝チ
斷テ此ノ路ヲ朕ガ意趣有ル二者為
令ルヘシ無ニラ大行道之類ニ二者我ガ子
孫為ニ令ムル無ラ日本之相續一又曰
子孫不ハ續カ豈ニ云ハンヤ大不孝ト孔子ノ
遺教ニ無キ後嗣者ヲ為ス不孝ト
矣吾レ為ニ釋迦大聖ノ弟子ト
豈ニ為ンヤ孔子小賢ノ弟子ト云云

政太臣花笑を太上良ハ見
かそうさしんるる孫ハ
ひまへつし深草の林くも
子孫おふ世めそ深く能
おぼしたのとくまし太上ハ
いろつきさりるしるそて。
世徳の為乃わかくらりよ
いつへあ。聖徳太子の此
墓とうく流り世る故
ひろる時もおぼ代るれしこそとめく子孫

あらしとさへふかりけるを作りなさるゝや
あさぢ生　名所にあらずこゝにてハ野辺の露をさへ
わかるゝんなりよあさましくさのさかりの家持の
ことよくとさきまもにさかりの名所かな山乃煙
草のたりとますうちさくの　まうさゝそのこと須乃
わたしのくちきのまされ物をまう
されすり露や玉川の　もり
あさきあ秋よ阿古志ぼし大和　あかすりひろへぐれ物
我ハ山城よわうもし後拾玉川
よろく会きり玉川又所の　乃あかりさよるろ入世ハ
名所とも知るらし清輔名
所よのせてると八雲抄よ　定めなれそゝつらされ。
ふ家義しもへりしあなる会
外題詞よおきえ乃名らくらぬるや　令まてのためられ。人へ
多く人あし又化歌とまかり
永暦の歌合よ名歌歌成　うち之しさへるし。めきを
まそくくあくしのまうく折
きんもあちさゝし　ちみ乃夕をきら。夜乃

夕をまつ　あしたにうまれて夕にしす
むしなり。へのとつふ
かげろふは日のかげのやうにいとはかなきもの也
遊絲蜉蝣蜻蛉野馬
陽焔
又かげろふといふ虫もあり
夕をまたずしていのちをはる也
おほかたさかりの世にもこゝろのまゝなるは
かげろふのことし
蟪蛄夏蝉　荘子希逸口義
蟪蛄寒蝉也春生夏死夏生秋死不見四時之全
ことはり　八千歳のよはひ
ありとも河海に無越閑唯
をしみおもふ心あらば
いのちながければ
荘子多男子則多懼冨則多事壽則多辱是三者非所以養徳也

蟪蛄の春秋をしらぬも
あるぞかし。つく〴〵と一年
をくらすほどだにも、こよなう
のどけしや。あかずおしと
おもはば、千年をすぐすとも
一夜の夢の心ちこそせめ。
すみはてぬ世にみにくき
姿を待えて何かはせん。
命ながければ辱おほし。
ながくとも四十にたらぬ

夕の日に子孫を愛して
朝露ニ貪リ名利ヲ夕陽ニ愛ス子孫ヲ
さかゆく　さくハ行を云之
いまうそあれまでハいとしく行を云
さかゆくさきもあるまじきものを
世をむさぼる心のふかく
論語ニ及テ其ノ老ニ也血気既ニ衰戒ムルコト之ヲ在リ得ニ
又云ク老テ而不ルハ死是ヲ為ス賊ト
世の人の　礼記ニ飲食男女ハ人之大欲存セリ焉　又淫声美
色ハ易ク惑ハシ人ヲ　白氏文集ニ
古塚ノ狐ハ妖ニシテ且ツ老タリ化シテ為ル婦人ト
顔色好シ見ル者ノ十人ニ八九ハ迷ヒヌ
假ノ色スラ迷ハス人ヲ猶ヲ若シ是ノ真ノ色
迷ハス人ヲ応ニ過ギン此ニ彼ハ真ニ此ハ假ニシテ
倶ニ迷ハス人ヲ云云

ほどにて死なんこそめや
すかるべけれ。そのほどすぎ
ぬれば、かたちをはづる
心もなく、人にいでまじ
らはん事をおもひ。夕の日
に子孫を愛して、さかゆく
すゑを見んまでの
命をあらまし。ひたすら
世をむさぼる心のみふかく
ものゝあはれもしらずなりゆく

えるゝぬ　えもいちねゝろ
ちしきふかひく八やしよかり
ちふゆうちゆしくちろし
んちさめん　松葉かまんとき
めさともきさきあさきで
ひとりふしまとわし

行るんわさましきさ、
世の久米の仙人もいんるす
色欲よいんかにいへのんへ
あろうるはとのかの仙
ひるとしいろのふるす
よわくらしく衰へよ
にさぬともあるうらう。
西とるさぬ白けちは必ん
とさめんしとるあるも。
久米の仙人ふるはちふ

久米の仙人　元亨釈書ニ久米ノ
仙ハ者和州上ノ郡ノ人。入テ深山ニ
学ブ仙法ヲ。食松葉ヲ服ス薜茘ヲ
一旦騰テ空ニ飛ニ過ガ故里ヲ。會婦
人以テ足ヲ蹈ミ浣フ衣ヲ。其ノ脛甚白
急チ生ス染心ヲ。即時ニ墜落ス
賛ニ曰昔三婬女挂言テ曰ク我不ルト跨カニ
一角仙ノ頭ニ不ト出山ヲ。果シテ然リ
久米見テ白脛ヲ而墜ツ。有ルヲ以テ矣
哉於戯色之毀ルヲ人ヲ也可ン不ル
慎ニ乎

女のこゝろのよろこびこそ郎(ら)ぬかしらひ久んへ
あしとふよわしちへるのさよりに比ある
らうさたんぺかり色
あさはさともわん
女の髪のあしくさかへん
こゝろの目るうゝあき。
人の彼んゝ人なしいのひ
とかきとひとこ趣う
のとちあれど。にまて
うちわむさ候ふも人乃

おのえ　かりつくろひりきを
さいろそゝねとふそすく

女はかミの　文選ニ衛右ハ與ク於
鬒髪ヨリ飛燕ハ寵ヲ於體ノ輕ヨリ
詩ノ君子偕老ノ篇ニ鬒髪如シ雲ノ
不レ屑トセ髢ヲ也

けいひ　気のこととあるま　又
形勢とて景気ともいふうり
うちある　常住躰乃ぶるう
てあるさはなり
いて彼とは　彼と彼をとるり

こゝふかきこのかうろくのよ八
みちけうらいくまの縁をまきとを
色ゆへくまよひしぬさうかと
煩悩をとくもあらぬうちかる
よくかんかんとうらくくいろを
こふりゆへなり

恩愛のうち　恩愛掠着之
六塵　眼耳鼻舌身意を六
根といひ色聲香味觸法を六
塵といふ
楽欲　げうよくとよむ
欲のひかりともなすに
厭離　しりそへし　いとひそむく
しとるなり

心ほまよりしてよく女
のうちにけいするいも欲を
男を押しとゞめもひそう
煩悩へくともわかねかさ
かもよくこしふやくく
色をちふうゆへなり。欲ハ
愛着（あいじやく）愛心の縁（えん）を相続（さうぞく）なく
源（げん）となし。六塵の楽欲（げうよく）
おほしとらへとも力なる
厭離（えんり）あへし。ちゝ中よ

かのまよひ
いろこゝろも　色欲ハとらへかくまつ
へとゝいひまもろかゝん　色の山河の花にけれハ
女のかほまもろく　女のかほとまかく
大般をつるくと云ふ　梵網經
まあるしとあり
女のそしけうわしくぬ　美女あらひ
悦ぬきハみよりも多く康
ハからあなをほなのあしこまく
のまなの必定るさこあるな
人ゆるゝ

たくみにいひひとつや
めくちのこそ乱きて
ものにも飲あるまとろう
妙とかくるしとゝめ
かなたまはかの髪さら
とよれな深きハ大蒙も
流あれ女のつきなわしさ
代のそんとそひつ
その姦るかるとそのひつくる
えうりいましめて　なくいましめく
あくへき

自警と云
末文公自警詩ニ十年浮テ海ニ
一身輕シ帰テ對ス梨渦ニ却テ有リ
情世上無シ如ハ人ノ欲ノ險キ幾ク人ガ

到テ此ニ誤ル平生ヲ
つきくしく　さとおもしめへき・海くひなすも
第之世話ニつきのことヽもふ　むねのつきくしくゆ
さくひと　まりしきこしうめとのや
うりのやこり　迭旅　寄寓　れるれ。さヽ人のみとやた
とりこれとへと奥すもれるれ。さヽ人のみとやた
須なしくる知ハさし入ヽなり月の文も一ことハ其
しくこと見あなそうしぷきめしくこらくり
なるねど。あこら抱あうくぽきとなるね庭
いまめりしくきらヽなるとして乃葉もふわうさ海よ。
うなりしくみつさこそうるま
いわくねともと云すヽなりつもなす
まさとるヽね　とらつなる　すのくまいうのぬれ
そのまヽの芥之
ことハくハ　ものうき之迭退こかく　れうしくちはな潤谷

洞谷　よろいろ々とふ之　も落松風そやとらう
松ゆくのくくきのことつうし　なおこそぷんおらしとこめ
い冬と花瓶ヨ挫乃茂いふ　き。松ゆくのくくこの面と
くらのやまとの抛日おね　浅らしてみうたそうぷ
のとろくの器をいふ之　のやまとのめつしえくえ
すんさいの草本まそくふのまくなるくも須夕とも名しく、
らす　枝ところめ叢ふとすヽとき。お栽ゑん草本まそ
しつくろひそな郁之　ふのまくゑうたつそりな
さそやかなうしへきむへさ又附の
まのなふりとくとなりうんせなかいぷんるめも色なしく
すくうとあうしこつまともあ　いとまひしゆくもやれ
さるるとといふすゑ

大かた歌のよしあしさ後ハそ
よろしかれ　これらをむねとせよ
てみるとたこすのしるしに
能因法師　實方云く井蛙抄に
能因法師ある時發意の西行が角あるに
ころあるしと發意の西行か角ある
見えてかくれ西行に對面せす
ましまさすとて

西行　俗名佐藤兵衛憲清
秀郷九代ノ嫡孫鳥羽院北
面也

あらましとむへさしいつの時の
まよのあかりさとぶるん
とそらちちなかにせむ
あく。大かたは我らか社
ことさ後はそしてなける
ましく。能因法師の歌に。乃
しんざん深山も鶴なさけとて
西行か後のかんくく。鶴の
みるらんは何かえさしか人へさ。此歌のかんさの
かりよるそとも。まとはま人らさりたるか〻と文

御たひ縁の小路文乃たちしまゐ小坂殿の子
あやの小路の文
に。前をやわか家ひろれ
さりしくハかのためし世に出しまし神よ浪や鴛
のむまわく池乃惟をとられハ。旅人し
あけしまは世路くみるんと人の跡をしこそ梅ハ
いつしくとそこにえんえいか
西行法師そしてそ法大る子もいかなる形か
ことしも旅ゐするそそ世り法
法大る子て
谷のまく
栗栖野　山城國醍醐乃邊之
さし秋のろうすの小野の萩の花
ちりうらん時よゆきくらむえ
非き月のころうち法とは
云ふもはなちく。おろ山里よ
露入る山し。おそろうかなかうけの細石御法とを

かくれなく縫するを居なりの手の紫やは
うはきうけひの雫なりて八雲とともにふ
あつか 阿伽ともいふ 閼伽ハ水の梵語
りのなしおく側の葉かけ
葉をもすらしなさ須人のゆき八
故へしかくてもありまじかをし表よみかへ
どにむたの庭より須さ山楠子の木の枝を
ゑくさも色よくよ 枝のさかひ 花つくよるらしなるか海
おく 皆そてみいおちそ人さ秋萩の
ゑくさもぬりよとうそ露 いりとさひしくかさ
又しうそぬとさめく此木ありましいかよ
察しうる

同しんさうん人へしをのやうに秘密して枕しさ
こころす とのこころを義之 表裏もあり之云也 うきも世乃ちらうさ々るを
もふうなくいひなくさまんしもそうれしうくさよ
さるかへおるまじきれは露きたうさんもむ
露うういさらん ひとふくのまくよおそ 名もうそす ひとつらんハ継おる人ち
笑まうへし やちんたりひよいちん金の
しそ実をまくりひとつ秘しうしいてうたり花
はんへそ秘いさやいおふなとはうそひふうさ
さるかうしさそとも打かくて流まし入あく
さゆるしなへとかれいおふうてもてまれと

もろこしにてちやうくわんのとしか
ひかりをはなちふみのあかりとせしも
のこらねなりしくハうきさうの
これよりひとしりきさん
ゆきふりすハおもくてびよもゆき
まれにひとしりきさへしおかれハ
たからのよしなす 由来も
ゆきむさへしらうりとあるさ
おへしる実の座のすいやし
しとゝ

韓退之符
讀二書ヲ城南ニ一詩ニ曰
時秋ニ積雨霽 新涼入ル郊墟ニ
燈火稍可親ム 簡篇可巻舒
又なをのちとなとも 狂傳
平日讀書ヲ上師聖人ヲ下友群賢ヲ仁傑曰東巻中方ニ與聖賢對ス何暇與俗吏語耶
とよめり 無起とゆかしなり
しとうさえ八重よみてうにと

ひとりさうんへハぢら
このよけむしいにしへ
こそありあやきれ人の
むかしたゝかにもとへしろ
のまめへこそまひきや
ひとうさりしたみのりしと
ふかいひろもくぬ世
の人をそらとそみぞ。
これあるやすくぞむまい
まれ。かまへハ文選のあハ

ふみの事
文選 梁の武帝の子昭明太子の撰也すべて六十巻あり
あつめたる あつめしるす
白氏文集 白楽天ヵ詩文をあつめたる書也
老子 姓ハ李名ハ耳字ハ伯陽又老聃ともいふ楚の人也老子経上下あり道徳経ともいふ
南華の篇 荘子のこと也
南華真経ともいふ老子のこゝろを篇と對してとく
より
はかせの博士 博学得業の人也はかせのこともいふ文
修文のさうらひあるべし
これたゞしき ちなみハおほくの文
選老子よりおこりてなりけるゆへ

まことなりけれ。文ハ文選
白氏文集をのこし萬葉の
詞のおもんじのこすのも
世ゝをとりけるも。いか
しへのハわざまことなりけり
老子南
和らかそれおりしき
かなしおやしのまことなり
つまちいさもとひ出れハ
おもしろくなそまうさ

わりしきハたゝりしろきさえ粧もふてさめの露にもさへ
ねそろしき故　寂蓮法師か云ルいやさしく此ぬぱ終り
ろハまれやうよいゝしきまのまりまへ一かしわりしくひ
かのきくるとしられたるつしきあかゝへさりとこゝろあいお
ともこ守つるの家なとしひつまハ
やさしさきさえましてやさしき
りのとわそらくいひるす
まトのすゝ
まことかつれなるとものやうにいわれそや
かはわりまことよくしこ出きいなりし要く守
よりかな物なりなくかしえかハ古今集の中
貫之　孝元天皇の孫なり　のなくれしとやとひつさへ
ハ名阿古久曽　あつまへまりうき　まことく今のよの人の
条まより
時みちかくよめる
ひとまかせ物すりなくに別れの　よとめへさしとうしとハ
ころかそくもみまほゆるる

是しるぞ世の中よハあさき難この数のこれ
源しぱ此舟よハかさらしてくくひそわくゐ
もきかまかくし。源氏の物語よハ神とハなりしよ
よのよハなりよ　源氏紙角よ　いそしくらなる新古今よ
我なることハ一事よめらなんと　ハおかろわさへ要ましひ
おすしまへろも世のこもろ
ようハおつくろめされりしうは　しきぞとらなとう
ゆうもうちの人ハ世まてりの
よさしいつへこさんも法かあ
しそ神へハなりしまさつゐき　ひなるのハ。西のくよかく
うこ世なりのなまてとさよ
ふぶそさこすちよひさうけ　さまとするあらやえ
んとさしきなのあるしそへ
のかとのよかなたちるうるを　ゆめ見ぱれとなる流
たえ出るよ
のこなれさへ　祝部成中なる　識判の付よろしさは
あるき

そのさく山さかりの花木のくかりさ
のさあ祐さ人によまさりしさ
歌も　まろ明公の十代の孫ほ
多拝此の時代和多不乃刪禪
國より人之秦漢末ノ禪
すのこう　八重桜よ雨行り
後よも花のまさもおとろへ
れよ乙此乃新(バカリ)未代よ渡へ
うつもとさえんしうつとおるせ
いさや　不知とうりいふしよ
りつへめとそいうとへ志らん
とあるし
うさまりて　龍舎よ多御く
ハ元やの方をあつめろをとい
へつも継因法師ヶ五代の并
抗まことかく八祠の所き
梲泪滅へし
梁塵秘抄　後鳥羽院ノ御
作也神樂催馬樂の類とえ
らひあつめまかく　博物志云

さうあやまくぽはみせおと
定まよかへし給下さ於ろ
よし或もう月礼よべう
をりぽあろみちのといは
しへまりつるねまとし子る
もあまさこぽいさやとて、よ
こあへろ花まし網やうき花書
もぽむつしの人のまあるハ
定よ向しのよあつ所ぽ
もくもをなかかしてぽと

秦青撫ヶ節ス悲歌ス聲震林
木ニ響遏ム行雲ヲ謂テ其友ニ曰ク昔
韓娥東ノ之ニ齊ニ遺糧ヲ過テ雍門ニ
鬻キ歌ヲ假テ食ヲ而去ル餘響遶ル
梁ヲ三日不絶云云　故雍門人
至ルマテ今ニ善歌哭ス效フ娥カ之遺聲ニ
也この故事よしりくうひ
ものと梁塵と云之
杜佑通典ニ云漢有リ虞公トイフ者ノ
善ス歌能ク令ム梁上ノ塵ヲ起タ
郢曲
問テ云客有下歌フ於郢中ニ者上
郢曲　文選宋玉對フ楚王ニ
元稹カ梅ノ詩ニ
郢曲琴室ノ奏ス　郢ハ楚國の
みやこなりさひあるし哥隆と
郢曲とつふるし
とうさ　言雑とく

うくもさよけりよあれ
ともふつくうち梁塵秘
抄の郢曲のことまかえ。
又あつまちあるかことかれ
ほうあれむぽしの人いう
よつひきくるることなき
もみなりくことくも
なりしや
ぼりくかもあまし吉川
旅ゑくるなむこそめさむしなくちもれぬさまく

ひまくらしこゑなりけりさゝなみのひくなみ。山
里らしいかくゐる侘ねるゆうしてかけりなる。新人
あまりすめて文盛るくそ糸の得意にさうく
あいひゆうこそ初しなれ人なみはくいそて万
よく流りひきの情きりそて洞庭とよれのうく
れいふく池上山里ありて能あらんもよりも人はたれの
はくハ一きハよく見ゆうこ去是
しそこそみちまちやも社ちとに思ひくこそわる

非楽　天照太非天のそそ勢せれりし
とうしてこりあひしきさ
天下そこにやとくよあるりなれハかくこそ念めぐりし
法非いのりもせられなるよ
天地勝合まさ本のなう
とくつくとしひらけをるたえしうるれ難得る

びはゝ三てうひまひ庭にをしなくもやくはむかし篳篥
まれハ又内侍所の御琴ハ箏。一のさそく人たへ
一条院の比なりなりしま
ふなり
和琴　あつさこうくとちて琵琶和琴
やまと琴ハ六張なこるくハくひさろを弦ハ琴うて
はくく六弦とうけく弾もつく見か詠の楽器のしらうわ
山手につさあめちくなはつさすかこそ
つきのくちとちすくんのようよもきよ海あん鳴れ
紀乃まく倭ゆを人はとのまきをつきやう
ほくまやら　小しぱ。木ちを過そ賦
まりちく　るとめさも世代むしきそう
しさ人のいめらへまれそち
孟子為富不仁矣為仁不富矣
閔子騫　伯夷　叔齊　顔淵
冨嘉　原憲　孟嘉　南華
老人　五柳先生　浣花翁
陳後山ホ乃賢人まづしくそさらんそいふもしか無さ。

許由 きよいうといひけるは むかしより賢人の心なるか
堯天下をゆづらんとの
たまひけれども受ずしてさりぬ
荘子に見へたり
高士傳ニ許由隠レ箕山ニ以テ手ヲ捧テ水飲之ヲ人遺ル一瓢ヲ得テ以テ取テ飲ム飲訖テ掛ク於樹上ニ風吹テ歴々トシテ作ス聲ヲ由以テ爲煩シト遂ニ去ル之
なりひさご ふくべなり 和名集ニ云ク瓢奈利比佐古斟ム水ヲ器也
かまはざるにはさらによ
許由とぞいひつたへたる。又ふ
うるさしとてさるべく
くそ。なりたてゝもしてさ
ふく飲ものとてぞあり
ひさこの事なりのを人
えさせたりなどは。邪国のえくさよりきたりを
かの風にゆきく鳴をうるさしとて捨
つ。其かよむとも それ飲たりし。いとくらきの

心のうちにもくらからん
心のうちもはれやらんとし
孫晨 蒙求ニ云ク孫晨字ハ元公家貧ニシテ織リ席ヲ爲ス業ト明ニ詩書ニ爲ニ京兆ノ功曹ト冬月無シ被有リ藁一束暮ニ臥シ朝ニ收ム
むら孫しかうらん孫晨は
冬の月に蓆をまとひて寝
一束あつくと。又春はねぶ
ふしのはれたちあしきを
の人は世といふしことゝへはよそ也。ゆとしめて世
りとも読て。めでたきの人は読書もすくさ
おもしのこゝろわかり 秋よそのとゝりうらもそ
松風子源氏物語に似たる
そむきしを 紫式部 かくの隠さ
二女の眺望をたてん
まのあはれは秋そ海され
ものゝあはれは秋こそ
源氏にも春秋のあらそひあり
白楽天詩ニ大概

四時心惣苦就中腸断ハ是
秋天 のこゝろ。長閑とかゝり
中春ハ、やゝ春めくころにて二月のころ也
きさらぎハ、なかはる、よそにてなかるる
なかそ也
まさきまつ花梅の咲かけし
ひとしの人々みその梅の咲かけし
ある花梅のうつろひ 花梅の香る
とまり人々さらのちうちとよそを一
梅の香ひとしきをこひしき
ある也
梅の花あまねく色ひらきて
おほかたとこの春のよの月
みちわたらせておもかけ聖徳
さらにてふすまとしてその梅そを
灌佛のころ これらのをのこ
こと云 灌佛ハ四月八日よ
とこなる此佛生會ハ推古
天皇の御宇ゟとまり 釈尊倶
毘盧城にて生まれ給ふ

偖それ人々とこの今日是
どぞれもきるゆまくど
一さくらさらさくさや
のハ春乃ひかりさしそめお
めでたきのころ色ますす
のかよ春めくくのや
いかゞ目出度弥の事も
出るゆる中くも春ふうく

じさき天竜水とそくらく
かゝせをまもしるとかく
ゆのころ 賀茂の祭とて 欽明
四月中の酉日とこそろ
天皇よりもはじまる
あやめふくころ 天平十九年
五月よ勅ありてく 百官諸
人ともに菖蒲の蘰を
くへしけるうんとの宮
中よ入をゆるさしと定めらる
弘仁式にも五月三日平旦
に菖蒲をまいらさると 南
殿のあまにすくとかりし
拾芥ニ云五月四日主殿寮
葺ニ内裏殿舎ニ菖蒲ヲ事 文
類聚ノ前集ニ云端午以菖
蒲ヲ或ハ縷或ハ屑ニシテ泛酒ニ
早苗とる さのふきそさらよ
しとろのまにいろくもそよ
と秋ちせそうく

御服しくかくく 衣ゝやう
くらしきさつかれこそ
わまきかきも春風うろて
さらくへのわつてくしくらう
るあ 春ぶよまうわ行ま
てしろつよ出ん成のそ
あるまれり 梅ハ久かり
よそおきまきるを梅のふ
御ひまそいかし へのこと
またりろ 新しでうこひ出

水鶏のさくく　ゑくくと鳴に
まきまいはらちさくくさく/\
鶏らかたらかとさしてつまとめ玄
かりん
わやしさ都よ久ゝかの
源氏夕良まてまゝの白くさ侍
とをんなかとや作ら玄のな
ハ人めさそらかわやしさ路ぞ
咲作らしとや
螢火
たら乃ねらゝなりの世ミミ分けよ
もとまね玄のハ夕ゝ月乃られ
詩学大成蚊ノ詩ニ與ニ蚊同カ擾ノ扇ヲ摩ニ
難ニ実ヲ繞ニ被ニ薫ヲ烟ニ即使ニ除カ
六月祓　八雲抄ニ云六月祓
邪神をそくうこむり気よ
あさしとうえにゐるまいら
そてわさのしろしてにくもら
へ夕夕秋とうしく
加ニ茂川のみなそこ清く照月と

らく山路のきよくれ療の
打月つくあさき海さきお。
とくく心ひまくく久貌
るす物り流弘の法要の
法の弟乃楞厳多く茂
つゆく涼しそ世のあられ。
人の哀しさも由さ
人の打をされし
よさかりのる九おほ月わ
やめらく法子衛とかれ。

わくさんやなさく人もとるか
都ハみふつさらく下よはゑまよ
まりり出くく月のわらゑをみて
とそりあらうと六月海やそこ
まうて照月出行く下しくまと
宗祇の頃云六月祓明月と由
人疑く古人六月く　此必出河
原ニ臨ミ祓又納涼及糸竹之遊及
詩歌之興恒例也不限晦日ニ
是ヲ祢皆月祓ト長元之比或
人ノ記ニ御倉ノ小舎人来ヲ可参ニ
皆月祓ニ之由催ス之ヲ件ノ祓ハ六
月十三日也公事根源ニ云ク大祓ハ六月晦日百官ことく朱雀門
よあつまりて祓をもとく六月十二日ニひあつし天武天皇の御
時より始まる又ヒ月わくよ照こゆうるのきと　とお月のお
うしのそうくするくハ又年乃令のうふうらしせ云ずと唱う
うるそ中侍へ佳り奉るよは性る関白の九よ　おもつすみなさる
らくわさのそとこゝろよこゝろてもとうゝへはるか此夫うを流す
へーとかんくくり六月田あら府ハ後の六月をえるうへさよ
し東鑑よ見くさり

水鶏のさくく乃ずし分
そうら九玄水月の法や
しきあまるゝうるあ
くみて扨毛火ふとふ
智しおりまうら。六月祓
又れりし。

七夕まつり　もとより秋なれ　七夕のひとつなにそこよひあ

しゝと云ふるもなるは信陳云　しられ

七月七日の夜とよろうつ天平勝宝七年よりはしまる乞巧奠とも七夕祭ともいふ今夕は牽牛織女の逢夜なれは烏鵲天河にはしをわたし翼をのへ橋となして織女をわたすといふ淮南子續斉諧記なとにしるし侍り

とゝくのつくしなとよ文とをさ糸のちよより文の糸とりて代具

るかいのなよ三年の内よりかうなとうひへつしこの

にまよ乞巧とやし

風土記曰七月初七夜洒掃中庭施几筵設酒脯牽牛織女相會守夜者咸懷私願或曰見天漢中有奕々白氣光曜五色以為徵應見者便拜願乞富乞壽無子者乞子惟得乞一不得兼求三年乃得

八月のはし　月令云仲秋之月鴻鴈来

やしく夜さむよなるきくるは　やしく秋風にはかして　なるくろるよ秋の下葉

萩のはし　萩の下葉なるて　るり　萩の下葉そつゆしけきなり

あかきをみてとりあへてかなてし秋のこそ

みなはかなき。又此萩の下葉のおしくさとそ思ひしられぬ。ひ

はしくさいみな源氏物語桐壺のまきによする

ふりて　しらぬおゆしとえてしさらぬいかりぬて

おほしさす　右衛の序よ　あはれ代侍しさてしいへ

おほしさるいらなりたそかに　ぬは勝るくなくまさなき

かくしなりしなるくまゝ　きは御世のあはれ

こそむかしの人は秋のてまに　ちさなれとさゝしまて。

りしなれはおもひとかりしは　ひやうしとうつきまれ

ひかりとかりなる　はれぬへのつなへきさま

ひやうしとつきき　萩のまつ

をしく

頃よりよ秋之

すさましき秋にして

源氏おきくかの露をは付くま

つかくへのくにとろうをかなむ

れ草のさかりとるもそのよのあはれ。さく〳〵雪ぬれ
むかし月よ香のひかりもあひさしくうつりしそ秋にハおもしろき
おもしろしそおもしろきうつ〳〵
とのおもしろくてはせのかくもかりそめのかれけの
のしもてさひろうされおもしろきのみえ
うさまあハれさしのつもれ草によそふ
されすさまじきことにいひて紅葉のちりしをま
なきかんへはふ〳〵おもしろくてあはれ。露いとしきうつりを
みるもまことにあはれさせたまふ
河海云清少納言枕草紙に
すさまじきものとおもふすのかたちあちこちにふる
月夜おうなのけさう又十列
冷物に十二月月夜扇木
あり
御仏名　十二月十九日より
或ハ一夜もしくは三日なり仏名会といふ
一夜もしくはかゝる仏名会といふ
三世諸仏の名号を唱へて
六根の罪を滅するよしなれハいさゝかあゆむかたに
名号をとなふるにより煩悩のあつまるをすゝむ

ころのさきのもしや宝亀五年十
二月しろしめす承和の比御しきかくもかゝり
八毎年仏名を三ヶ日のあいだ行はせ
たまふしく勅有て禁内にて
拾ふみしこりあくもあり〳〵九日より
根源に載たり　九年　公事
九釈静安従ニテ西大寺ノ常騰ニ　釈書
学ヲ法相ヲ嘗テ居ニ比良山ニ読
十二仏名経ヲ礼拝懺悔ス其
聲聞帝闕ニ聞ユ諸州ノ間ニ有ル
者ノ曰ク玆ニ教賜僧官ヲ承和五
年奏シテ置ク宮中ノ季冬仏名
懺悔ヲ
荷前　十二月吉日を撰ふ先
十三日よりはじめてさためて使ハ公卿殿上人のともあるべし
荷前とハ十陵八墓に年の始に幣帛をたてまつる
先十陵の内一ハ天智天皇の山科陵山城国山科にあり
ば帝の御陵にまつるにかゝりて山科の里にあるも
遅きかたちの御陵ハ尚不改代々のかはりにいたる
御陵のさきにて八陵をそなへておこなはるゝなり

おなしくゆかりのことなり。白壁天皇の田原のみさゝき 宗遠
天皇の八年よの後仁明天皇深草の陵をやまとのしへおす
にしなけれ延喜式祈年の後の
祝詞に荷前とよくあかし
はなて
公事 禁中にておこなはるゝ
こと
追儺 公事根源云十二月晦
日よりおこなふ今日は大舎人寮官を
もて大舎人寮儺をはしる
め陰陽寮祭文をよみて
其のるまつりて上卿以下
ものをもち多くの人々の方に
主て桃の弓葦の矢にて
いる仙花門より入て東庭をへて滝口の戸より出る今夜は
紫宸殿の大をとる多くを東庭朝餉臺盤所のまへのみ三ヶ所
臺をとひて追儺を行ふとそ
らふ人を君よりも八方相氏をめして追儺をいふは年中の疫気をとる
西といふにて撤まきに付て四月にて仮にして廿人の布衣著き
おさまりし年の内裏の四門をさるる文武天皇慶雲三年十二月にはしま

まのいそはにたらうつき
ねてくしまかくれにおくす
あくさ海そいらりてや。
追儺より四方拝に
つくしそなりしかれつく
そりの秋かつてきた。

おなし年二天下に百姓多く疫癘によりて死にける時天地
四方拝 公事根源云元正の寅の時天皇属星を拝し天地
四方の山陵を拝し年災を払ひ宝祚を祈りたまふ事のおこりて
侍るにより四方拝ありしも見えて仁和五年正月寅刻に天地
四方属星山陵を拝したまふ中宇多帝の御記にあれは蟲鶻
とありしも皇極天皇雨をいのりたまふて南淵河上におりて
四方を拝したまひけれは雨五日ふりて田も田になれりと見え
侍るとそ 撒まきに其の属星を拝して災難を除く
趣は天地瑞祥志といふ書にある事とぞ 足を示すにも
いそかしく見えし
さるへきのうちもちいるにと心ありけるを
おりふるまの年の始めに多くの
くらふはまきやおもひこそすん
或は衆多鬼と云々
明くるとそのくしき 年の始
まもるとていつつて又暮り
立てかへしきことをうましき
此の段に節分の夜に
さるるに出し行くりなく
わ悪きことに文字あり 蓋

ねとしもさして祝年を
いのちそへてかりつくさ
こしりておもひさし。ぞのみ
まゆみとりてもくしみて
たちまちくわしくそよけり

ふし男文字の文作よ是すう
とも云とき云の蛇乃首尾相
救ふくいふ又は服はしれしるの
ろたは源氏物語の例とらくも
しゆるやうにしてつまりなくほ
ほく

大路のさ海わきそこまうし
素盞烏尊の南海へかくし
れひしとく身は巨旦将来
よたまはひなまえともうしなり
す蘇民将来やとをとり
もうそな詩いさしく巨旦を
ころし其跡をかうほろこ
まをなの世までのまろし
ばんとして巨旦ヶ墓のよまき
ふかとす年の始よ門まる
ふりひそう晴明ヶ簠簋内傳
よみえたり

御よふかぐ暁がたよりさえけが
小声なくながらあなたよ。
のなるまへほそうに似さ
今くなる家とを玉すなる
まづ。この比事はいふなど。
あたりのことまいれとぞ
こふくあるしてそおそ
きるらかくて明行もの
のえしき眺日よくなる
里とへ入て〇し。ひらくめぐりしさらきてれもか。

大海のさ海わきそへもうしてこそすゝめや文にまし
けなるこそまさあわれなり

此世のかくし
世のうきめみえぬ山ぢへいらんには
おもふ人こそほだしなりけれ　古今よ
りこゝぬ事よ　ゆくぬ事なら
そしのうさり　雪月風花よ
多詠したしきこと李白ハ豪放
謫仙人なれども餘春と情し
あり

家ありしとなやなりせ
旅人の此世乃ほうしも
さらぬ事よりでなみなみ
秋のことそおしさとび
しるへ海としよさく覚
めしなれ

沅湘日夜　三体詩戴叔倫ガ
詩ニ沅湘日夜東流シテ去ル不為ニ愁
人ノ住ルコト少時モ　註ニ云ク身不レ得
去ルヲ故ニ羨ム水ノ之去ルヲ所以深シ

月は夕べ月こころにしみ
さむしめれなれわかなみの

傷ム己ガ之不ルヲ能ハ去ルコト也蓋叔倫ノ事ヲ　月のよりおりなうさあへあ
曹王ニ於湖湘ニ有リ是ヲ作ス祭ノ歩　らしといひしよ。又ひゝら
游フ謫郴州ニ有リ詞云ク郴江幸ニ
達ル郴山ヲ為ニ誰ガ流レ下リ瀟湘ニ　寄りて長ろれとあれは
去ル正ニ用此意ヲ流水湘水皆
水ノ名　しころ坊しされ。おやまよ
嵇康も山澤にあそびて
文選巻四十三嵇康與山壽　やまいは河ハ気あつさう
絶交書ニ云ク游ビ山澤ニ觀魚鳥ヲ
心甚ダ樂之ヲ一ビ行テ作ル吏ト此事　む月花いさうし風のと
使廢ス安ンゾ能ク捨テ其ノ所ヲ樂而從其ノ
所ニ懼ル哉　嵇康字ハ叔夜竹林ノ　こそ人まんへつくされ出
十賢の其一人也晋書に傳あ
て
人遂くゑ萃さしき　玄賓　まそこりくくさまく流る
僧都のこゝろ
こゝろハゑまきくしそ者はなあのうしきこゑし。附
好乃らゝハすまるてことてて
とゝ色しの守めくくさされ。流れ月東流去。

漁人のくあめとく海なりのかも世すゝなさく
おり窮岩乃人倫しゝそであれもちしり樵山翁も
山澤よおそしく鳥獣なれバ心ざしのゝとを
いつはり人をくゝ多草ごさすれはこゝろもひあやま
こゝろなわりらんなつくさびろのあかし
すのみそくゝ
の數也　大工番匠　何ゆもかるれ世のくらて
あさうしさゞとやらいはひ
文の知
息ヲ云　文章或ハ往来消　下よりやくにうそ嫌
文古　文故とも云ものを　めまさぢ其あの乃らくく
きちしうなう字
とゝうその多くおそくなか
とゝし文故推といふ禅録よ　のつくまうらいつしきら

かんくら
くいふ羽　半生の常様之
主殿寮人数して　え度ろ
かく八秋の行幸乃時火を
ともるをとつとむるか
最勝講　一条院長保四
年五月七日より始くそこ
ころから吉日を撰て五ケ日
あひだ清涼殿にて最勝王
経を講ぜらる東大寺興
福寺延暦寺園城寺四ケ
大寺の僧衆参りてこれを
ろふるゝ。読義講師聴衆
るしありと云事根源に詳
なるし
れいろのろ　内講乃廬之
最勝講の終義を咲不
と云廬はいろいろとある関
白の内裏にて休息せし
所を直廬と云べし　直六

いさのとぞ代の御ぞそお
りしと九重へ又の涙なと
そきるの衣かさはへりし
さらくいふ頃もちちわけ
うきそるうきそくゆく
るれば分しへは車のきま
よ火ちくもをとそてい
ひしと今やもの人いなそ
わまちにおきまとせよ
主殿寮人数そさせよ

御直の義く
九重　我のみちをいふ一条よ
て九重とありし長恨歌よ
も九重城闕ともいへり
よつ子　世にしられたる義之
露臺　内裏御殿の間の名
ろうし
朝餉　清涼殿の内乃南にあ
あさがれひ　朝餉間二間せまくて朝夕
供御をまいらする南に平
敷二枚東北に翁の屏風を
立夜の方に副障子有
御屏風の内外に御調度を
置之禁秘抄河海るとあり
詳也

へきをぞらわしたる
せよとのひ最勝講乃
は結願とへばろう
のろてうそいふとがうろ
とりの白わしときらうれ
人は物らまし
杓とろへ未の世とは
いとかし九重の御さ
ろうまさ海てそよつるめ
てさき物うれ露臺

ちかきあたりの門　一本に何
殿と南殿とかけるハ非也内裏
の諸門数多あるゆゑに一〻に
いはんとて何〻といへるハ禁秘
抄拾芥抄等にくはし
小板敷　名目抄に神仙門
中といふ今ハ東にあり　高遣
戸　今ハ清涼殿の坤
の廊下の西にあり　設ハ
陣に夜のまうけせよ
晩ちかき時を用意することを
又まうけとハ灯をまうくる
をいふなり
かいともしとうよハ
火をとくかゝげよといふ
ことなり
禁秘抄云夜御殿四方〻有
妻戸南大妻戸一間也帳同

何殿何門などはいみじともきこゆべし。あやしの所にもありぬべき。小蔀小板敷高やり戸なともめでたくこそきこゆれ。陣に夜のまうけせよといふこそいみじけれ。夜のおとゞのをば、かいともしとうよなどいふ、又めでたし。上卿

清涼殿ニ東枕疊御座敷也
御枕ニ有二階奉安御劍
神璽ヲ皆有覆蘇芳也
御劍東南帳ノ西ノ角ニ有燈
樓又帳ノ南西北敷疊ヲ爲女
房ノ座河海云夜のおとゞの
のこと角にて燈樓あり掻燈
ともしびをかゝぐる事をいふハ
宝剣神璽のおはしますところ
上卿のありして　上卿とハ
大臣納言參議乃上首の座にて
政事を行ふをいふなり云乃
諸司ハ内侍よりはじめ
諸司の下人とも　諸司とハ
百官職寮司等をいふからなり
下人とハ諸司のめしつかふ人を
云
徳大寺の太政大臣　實基公也

の陣にて事おこなへるさまはさらなり。諸司の下人どものしたりがほになれたるもをかし。さばかりさむき夜もすがら、こゝかしこに睡りゐたるこそをかしけれ。内侍所の御鈴の音はめでたく優なるものなりとぞ、徳大寺の太政大臣は仰

国立公文書館
National Archives of Japan

忌詞といふこと
延喜式第五斎宮忌詞内七言仏ヲ称中子ト経ヲ称染紙ト
塔ヲ称阿良々伎ト寺ヲ称瓦葺ト
僧ヲ称髪長ト尼ヲ称女髪長ト
斎ヲ称片膳ト外七言死ヲ称奈保留ト
病ヲ称夜須美ト哭ヲ称塩垂ト
血ヲ称阿世ト打ヲ称撫ト宍ヲ称菌ト
墓ヲ称壌ト又別忌詞堂ヲ称香燃ト
優婆塞ヲ称角筈ト同第六
斎院司ノ忌詞死ヲ称直ト病ヲ
称息ト泣ヲ称塩垂ト血ヲ称汗ト宍ヲ
称菌ト打ヲ称撫ト墓ヲ称壌ト
又一説に仏を称ぬ物とあり
みくらもとくにさもじとつし羽
萬葉集雑部に選子内親王
斎院のうちにてとしひさしくなりける
とき西にむかひてよめる

せくまぞなる
斎宮の野宮よりはりま
もとありさ海とぞやさし
くれなゐしるさとのゝ
墨をば染しる煙なり
といひてあらき染紙など
こゝろなるもいはしとへく
神の社にそすまふらく
高めりしさかおかれや。
おのらる森のえしきも

はゝくしといひそくいさぬよそれハ
そゝうへそわさそ祢宜のまちうく
餅にゆふかけゝる　榊とも賢木
ども書るとぞ八重榊ヲいふよ
ちはやぶる付きて神ぞつかへゆかへ之
木綿にて麻幣神々の家に
必るものとぞ
伊勢　天照太神のおまつり
賀茂　雷神之下賀茂ハ三津神世紀之にも也上賀茂ハ別雷神之
春日　春日四所ノ大明神諸第一殿ハ武雷命第二殿ハ斎主命
第三殿ハ天津児屋根命第四殿ハ姫大神也　神護景雲
二年大和国三笠山に四神をしめまつるとあり
平野　山城国葛野郡にあり延喜式に平野神四座今木
神久度神古関神相殿比売神と云　住吉　日本記伊弉諾尊
日向檍原にてみそぎし給ふ時海底より出る三神なり　三輪
大和国にあり日本記に素戔嗚の子大己貴神を大国主神
とも申其魂魄出雲国より大和国三諸山へうつり給ふハ
とかくいへり三輪神とも申　貴布祢　貴船
とも書山城国愛宕郡にあり祈らるれハ晴といのりても
雨を請ふにも此社を祭也

さくらぬよぶらんきみ
さしてさかきにゆふかけを
ならぬとひとしくるみね
しぐれたりしきぶ

吉田　此社ハ春日明神を勧請せらる之　大原野　此社ハ
小塩といふ文徳天皇の時始て此所を祭る春日と同体なるゆへ
春日ハ祖をまつる所なり后妃夫人藤原乃氏よりおほくいのりまふ
まつる之　松尾　大宝元年秦都理はしめて此社を立
たり　日吉　三輪　當社皆同体の神也
延喜式第九ニ神名帳ニ山城
国葛野郡松尾神社二座と
あり
梅宮　山城国にあり橘氏の
祖神之

飛鳥川乃淵瀬　古今ニ
世中ハなにかつねなるあすか川
きのふのふちそけふハ瀬となる
飛鳥川ハつねにかはれハ世よりふるき世なれと
あひそめてし人ハおもはすましき
附録　又同序にとある
是ことさら色そのつゝもかへらぬ
ゆきさえなかのくもあり…ある

伊勢。かも。春日。平野。
住吉。三輪。布祢。吉田。
大原野。松尾。梅宮。
飛鳥川の淵瀬つねなら
ぬ世にしあれば。時うつり
ことさりぞ。たのしひかなし
ひゆきかふとも

陳鴻長恨歌ノ傳ニ時移リ事去リ
樂ミ盡テ悲來ル
此詞ハ此哥よりのうつ
とのことは又見えたるをもて
也
里ハあれて人ハふりにし宿なれや
庭も籬も秋乃野らなる
桃李ものいはぬを
史記李廣カ傳ノ賛ニ桃李不言下自成蹊
昔二品ノ詩ニ桃李不言春幾暮煙霞無跡昔誰栖
京極殿　拾芥抄ニ云ク京極殿土御門ノ南京極ノ西南北
二町被入道長家或ハ大入
道殿ノ家上東門院是也
法成寺　五條河原にあり
後一条院行幸ありしに
しもろし菊花ちりよしあり

あさりも人をもまねのつとを
樂しみなきまゝ人あり
さきりぬ桃李ものいはね
罪ともふかしをかす
らん満てもいかに人乃
変しとあるもらん江の
そのこころへ宗極殿
法成寺もしかなくそ志
とゝまるとも変しらは
けふさ夜のあはれなるき。

京極殿は宇治関白頼通公
すみ給ひし道長公の御子也云
なりけり
志とゞまり事変じ　昔の
全盛の世にくらべて今の衰へを
く志つくしまつるをいはんとて
あはれなるを
庄園多くよせられ　道長
公は在中に法成寺〈庄園
御寄附せられけるとぞ
して栄花物語にあり
我御ぞうのみ　我は皆孫也
帝の御うしろみ世のかため
摂政関白太政大臣の事也
金堂
倭名集云仏殿金堂
也風雅集にみえたり尼法成
寺にまうでゝ後よみ侍りける
歌
みかくれて見しなかの世のあともなき
ちりさかりさきこその事にまさる

御堂殿の作りみがかせ給
ひて。庄園おほくよせら
れ。我御ぞうのみ。御門の
御うしろみ。世のかためにて。
行末までとおぼしおきし
時。いかならん世にも
かばかりあせはてんとは
おぼしてんや。大門金堂
など近くまでありしかど。
正和の比南門はやけぬ。

正和の比　花園院の年
号なり
無量寿院　法成寺の内にありし院
也と安置せられける無量寿
院と名づく仏九体まします
九体の浄土にて上品中品下品あり
さりとも上品中品下品なりし世徳
ありて此院いとゝしく
またもかたはらに
丈六　仏のたけ一丈六尺也
ありのみ
ありのはなきことよりこそ
寺のことのしく見えてまた
兼此院やまもりの額と法成
寺のことなり

金堂は其後たふれふ
したるまゝにて。とりた
つるわざもなし。無量寿
院ばかりぞ其かたとて
のこりたる。丈六の仏九体
いとたふとくて並びおは
します。行成大納言
の額。兼行がかける
扉。猶あざやかにみゆるぞ
哀なる。法花堂なども

いまさら御ゆるしも又かはりまくらおもはんが
わかのみちおこなはるゝさかりにはそのつゆり
まへかわおもてとおもきとけさうに書きたる人
もなし。さきにいはるゝ川はたえさかん世にまかりくだき。
たひをさきてんてそてたるれあつく入れ

風ぞ外にみへまかりしかゞの心のまゝ
おなじ古今の序に云く
桜花さくらちらぬとみえしかど
人の心たり風もしらぬ人ぬ
多くのものかはるこゝろの花によまれ
人の心のそまりて見るかの
しく世のおよそみゆへ世の人の
わらにちりにちりかへりゆくを
いちとえくの和りもそうく
光のたとえ

風も吹あへぬこうら殊子
人の心の花によまれけり
年月とともへいよ長じことく
しきの素ことを見に
また掘りてもよきかは

白き糸のそまんしとぞおもし
高弁上人白絲をみてのうたに
こんぞうしきをよみ
風雅集に
おりさまくのころを思ひて
そむまじいのそまりえよろしくかん
淮南子ニ曰ク楊子見テ逵路ヲ而哭ク之ヲ為ニ其ノ可キ以テ南ス可キ以テ北ス
墨子見テ練絲ヲ而泣ク之ヲ為ニ其ノ可キ以テ黄ニス可キ以テ黒ニス高誘ガ
註ニ曰ク悩ハ其ノ本同シテ而末異ナルコトヲ

堀河院百首 百首の百首お
其ぬおの百そくハ於之須云義
系云実對進之うぬひくむ
しかそのうへ判云実で
おゝく堇莱の歌く

よ殿りるひとぞさ
人のわかりのも伸ゝりて
くるしき抱それ。さまれハ
志かさ系のそまんと
をうわきゝみちのちまく
乃見かまんと保の重
くんともまえんりし。堀河
院の百首の御中よ。
むかしいふけり堀子
ハおきよゆみ阿たそれ

ましてのすゝまきのうしてさひしきうしき
さるおしと作りまさらん
御國ゆつり　天子の位を春
宮へゆつりたまふ時の儀式を
譲国とも御譲位ともいふ
劔璽　内侍所　是を三種神
器ともいふ　劔ハ宝劔とも天
叢雲劔ともいふ
神璽也　天照太神天乃石窟にこもり給ひし時諸人のかくて
天の香久山の榊の上枝にかけたる八坂瓊之御統流ましまし榊瓊の
と天照太神素盞烏とちかひ
ひとつ時に髻よりとりて
まさかあかひたるをいふ
内侍所ハ賢所ともいふ孫後
のことく八咫鏡共八真経津鏡
といふ
新院　御位をさり給ひ
たまひぬる帝をいふ

御國ゆつりの儀と云れ
こをつれてく。劔璽の御傳
ちかしも（ましくらくは社
ときかまもなうんほそゝれ
新院のおりゐさせ給ひて
の御よゐせ給ひなや
とのゝうちをとゝのみやつこ

とのもりつかさのよそのみやつこ
主殿寮の下司とも禁中乃
掃除をとゝのふ
とものみやつこ　ともハ伴氏の
ものにて衛府寮の下部とある
くにやつこハ御奴のことなり

まさかしてたちゐね庭
まちそちうしく
今の世乃ましたよ
西さいく院よりは家なんへまいりそさひし
きたなかりしかおほかる人乃らんもあはれね
なるさき

倚廬　御忌のうち居給ふ墻裏板
云諒闇の内乃皇居之以白
易月とて十二月の御忌あ
るまし
おしのうち　墻裏板云倚廬の
御所はてしきとさけ葺の
御簾布ノ木ノ太刀平緒其
外装束等皆非常也一説

諒闇乃年ハわうちなる
とハおしろしかの御めの
さ夜なくて。板敷をさけ。
おしの御座さうもそ布

まみすと翠簾とかきて布
のもかうと布ノ帽額と云り木
瓜ハわけたるやうにしたるなめ
やしなひ説く
太刀　玉作りなく銀のかなもの之
平緒　色も黒染之
ゆゝしき　あてなくいふまゝにし
ちらしく
とかくての
にしきのとひしき物ありて
おそひむかしあそひのてらを
みれうの哀なるらしき人の手
つまくる見さうしおくう
人ごころまりしくのち　人のね
ありまきくろかとそう後漢書
列傳ノ五ニ來歙(キウ)書ニ日ク臣夜人
定テ後とあつて
すさひ　よすさひの事ちく
さむくまくらきく　よろつのゐりく
ゐとろく

の恋しうあらくしくぽれ
衛府(ゑ)な(と)どともうちかたな
人のさうそくたち平緒(ひやう)
まく(こと)大様(やう)なるぞゆゝしき
左門ハ大臣へはたまはり
色かりしこの恋しきの
そのまんりたるなれば人ありつ
甲くはなれ教のまと
さひしあれとなれくそく
さわさてめぶりせし

うたへのなゐなりし
に衛府男さゝりける男の手を
とさりあつめくやりとりつて
よめる
あつまにとうなもまのおうきと
あるにをかくうらしかうる
文選五十六潘安仁か誄ル
楊中武カ誄ニ日ク披テ帙ヲ散ス書ヲ
屢ハ觀ル遺文ヲ有レハ造ル有写ル
或ハ草或ハ眞執玩テ周復シ相見ル
其人ヲ紙ニ勞シ千手ヲ涕ス霑ス手
巾ヲ白樂天感スル舊ヲ詩巻ニ詩巻ヲ
詩ニ夜深吟ジ罷テ一長吁老涙
證ス前湿ス白百二十年前ノ舊
詩巻十人酬和九人無レ

新撰述よ
ごゝろふかくてなほしたるを
もうなか中よなれ人のよ
あらひ恋ありをとさひら
久しくなりてそゝそく
ひさしのゐちもしれ比
武(わう)人の文まよ久しくなり
くいかなる折いつの
年なりけんとおもふ
あはれなるぞかし。てなれし
くそくなども心もなく
てかはらずひさしきいとかなし。

中陰　人死して未來生の中有に生ぬ間のうちをいふ
有ニ中陰と名つく又陰ハ
受受想行識是之或ハ一七
日乃至七々日のあひだ死すれ
ば陰より受生にいたる迄中陰の義
也常施餓鬼にかよふなり
心あらまし　源氏に見えたり
心念誦ともいふ心にかけつねにさ
らすこゝろにおもひてとなへるべし
海は心のことくさ義之
周章　アハタヽシ　日擾
あのまゝまね　ゆゝしきことにいふ
ゆゝしきこととよきこゝろあるへし
そての月　四十九日也
そのあはれ　日数とていふあ
うしとよみ見えしかく別々
まかりしも退散とみ義ともに
人まかりありといふをあやしみ侍るをも
あと通ひとそれりけるとも

人乃なき跡ハかりなるかな
しきかなし中陰の程
く。仏果をさとるへく
便（たより）しくせり花咲あ
まるあひかく。後のまさ
ぞいともなきあへなん
あかくし日数（かず）のなや
あくるのとそおもはれね。
まその月いとさるけか
うきひよりみえまさく。

さらく参られけれ　日本紀に云
とふくの事かとしらし云云
海のうらくのかしく云義之
史記汲黯傳上曰吾欲云云
とありて又哉とも云りくと
むしとあるか是ハ此この
義之
あかりしこ　下学集ニ曰ク穴賢
上古ノ時倭漢両国未レ如レ家ヲ
人居ニ土窠ニ恙虫螫レ人ヲ故ニ
本朝書礼ノ末ニ相勧曰穴賢ト
言ニ土窠ノ之穴賢ク閉塞テ可レ防
恙虫ヲ　無レ恙といふ字ハ
戦国策よりいでしゝかのそ
らそらといふ詞之義之
世俗の消息の末に穴賢と
云ハ恐るゝのかしこき
此ひとへもあり書簡尺
牘の書尾に自畜保畜自

我かしこけれおもひきさら
さめらぬくれまさあら
まへるとのすゝみに立へ
まつくそさしにかるとき
るれおはりへさるく
のらいかなしこよるの
こめいむるるとそるき
いへるそかいとかなる
よからと人のかなる
よくそれのまいき年月

麦丞祝珍童ゐとしとつごと
しるありとおもく究り
まへにゐよと云義もあるべし
うつりのかうにかよふか　如く
とらわ義傷の中なりと云
義之
年月へても　源氏玉鬘よ
年月へてつもしゆきとあり
さうし久かりの案うを
浜なりと
さらのの月くよへとし
文選二十九古詩ニ曰ク去ル者ハ日ニ以テ疎ク來ル者ハ日ニ以テ親シ出テ郭門ヲ
直ニ視レハ但見ル丘ト與墳ト古墓ハ
犁テ爲ル田ト松柏ハ摧テ爲ル薪ト
白楊多シ悲風蕭々トシテ愁殺ス人ヲ
思テ還ラント故里ノ閭ニ欲スレトモ歸ラント道無シ因ル
詩ニ曰去ル者ハ謂死ヲ也來ル者ハ謂
生ヲ也不レハ見容貌ヲ故ニ疎也歡
愛終日ナルカ故ニ親也

ゐくしも露ころすれぬ
あらひもしげかるをのみ月に
よそへしもしへなをよるを
まこはさかろてしもとされ
もらわれなきくぬらりや。
よとなりしこといひそら
もまりひぬらんなりと
さぶの中によさめく。
さるへさし見りわりまとて
浜やみまとれ袖なすくそとれ

されいふと　らの年月へても
それわと云はあくまくの
河之よ手とれわて云そのさハ
ちらわれ深えめくやむさ也
しろうすなりとても　いふく
名かてもあるなるとあり
こされなり　されしよとゆ
ハえ　うつは　死骸之
源氏桐壺よむなしきからり
ととあるを
なうとと　河海よ氣疎と云
あなそうしき義
卒都婆　翻譯名義集ノ第十七ニ
窣堵波西域記ニ曰ク浮圖又
曰偸婆又ハ曰私偸簸皆訛也
此ニハ翻ス方墳ト亦ハ翻ス圓塚ト亦ハ翻ス
高顯ト義翻靈廟ト劉熙釋名ニ
曰廟ハ者貌也先祖ノ形貌ノ所在
也又梵ニハ名ク塔婆ト發軫ニ曰ク説
文ニ元無シ此ノ字徐鉉カ新加ニ云ク

をこゆもし。ふ蓋なり
さうそえりの嵐の月
のこそこと悔すれら之
うちかなむ。おもひいてて見よ
人わらんほととそあめ。
そもえ袖なくうせくぼ
つるかなそらのもと名
くいわりまとやいそふ。
さるいはそふまさした
えぬまさいつまきの人と

西国ノ浮図也言浮図ト者此ハ翻ㇾ聚相ト戒壇図経ニ曰ク原ニ夫塔ノ字ハ此方ノ字書ニ乃チ是物ノ声本非ニ西土ノ之號ニ若依ニ梵本ニ瘞ニ佛骨ヲ所ノ名ケ曰フ塔婆ト

名をたにしらす年々の
春の草のみそ心あらん
人ハあはれとみるへきを
はてハ嵐にむせひし松も
千とせをまたて薪にくたかれ
ふるきつかハすかれて田と
なりぬそのかたちたになくなりぬるそかなしき

よもきう　無常之
そもまたほとなくうせて　それ
ともみえるもこそのあとをも
あらくうせてはそれ傳ふる
きゝつたふる
いつれの人と名をたにしらすとなり

白氏文集　古墓何ノ代ノ人ト不ㇾ知　姓ト与ㇾ名化シテ為ル路傍ノ土ト年々春草生ス

まつるくさりわるこそかなし
しきりくよそく
しきとく　心あらん人の
人のかり　人のかりしく
許の字之

雪のおもしろう降たりし
一筆人のかりいふへき

あひみいふゆけいをのよの
沢風さひしくみるらく
文をやるとて
とく雪のこと何ともいはさりし返事に
此雪いかゝ見ると一筆のたまはせぬほとの
ひかひかしからん人のおほせらるゝ事
きゝ入へきかはかへすかへす口おし
き御心なりといひたりしこそおかし
かりしか今は亡人なれはかはかりの事もわすれ
かたし

ありし人せさ
せさせ給て
たてまつりて
優なる

九月廿日の比ある人にさそはれ
たてまつりてあくるまて月見ありく事

内閣文庫

侍りしにおぼし出る所ありて案内せさせて
入給ひぬあれたる庭の露しげきにわざと
ならぬにほひしめやかにうちかほりてしのひ
たるけはひいとものあはれなりよきほどにて
出給ひぬれど猶ことざまの優に覚えて
物のかくれよりしばし見ゐたるに妻戸
を今すこしおしあけて月見るけしき也。
やがてかけこもらましかばくちをしからまし跡
まで見る人ありとはいかでかしらんかやうの事
はたゞ朝夕の心づかひによるべしその人ほどなく
うせにけりとき侍りし

遷幸　新主へ移り玉ふ事を云　ちかし
玄輝門院　伏見院の母后洞院山階左大臣實雄公の女也
閑院　拾芥中末云閑院二條南西ノ洞院ノ西丁町冬嗣大臣家金岡畳水石公季公傳領之
くしかたのあな　葉の字なり　へしの葉の形千葉なるを　せうじのこゑなるべし

今の内裏つくり出されて
有職の人〳〵に見
せられけるにいづくを
難なしとて既に遷幸
の日ちかくなりけるに。
玄輝門院御覧じて。
閑院殿のくしがたの穴
はまろくふちもなくてぞありしと仰られける
いみじかりけりこれは葉の入て木にて

ふかきところをしられねはあやまりもおほくあるべき
ことなるべし

甲香　本草圖經ニ曰ク甲香今醫家稀ニ用ユ但合香家所ニ須ツ又有リ大小ニ用テ小者ヲ佳トス也可ニ聚ム香ヲ使ム不ラ散也 和名[illegible]
集ニ曰ク異物志ニ曰ク甲香螺屬也可ニ合衆香ヲ焼ク之皆使ム益サ芳ヲ獨リ燒ハ則チ臭シ

甲香はほら貝のふたなり あつかひちいさくてよろしからん のほそのほそてあかり
へ[illegible] 一本よさんへとしていくつか貝のふた
[illegible]

仕丁やあまのかる[illegible]

仕丁と云[illegible]

[illegible]

朝夕へだてなくなれたる人の、ともある時、我に心おき、ひきつくろへるさまに見ゆるこそ、今さらかくやはなどいふ人もありぬべけれど、なほげにげにしく、よき人かなとぞおぼゆる。うとき人の、うちとけたる事などいひたる、又よしとおもひつきぬべし

名利につかはれ　荘子盗跖篇ニ子不レ為レ名ヲ我正ニ為レ利ヲ名利ノ之実不レ須ニ於理ニ不レ監ニ於道ニ　害をかひ　文選不レ懐ニ宝貨ヲ以招レ累ヲ　身の後にハ金をして　白氏文集五十二ニ身後堆レ金ヲ拄ニ北斗ヲ不レ如ニ生前一樽ノ酒ニ　唐書秦王引テ尉遅敬徳ヲ為ニ右府参軍ト屡立テ大功ヲ隠太子嘗テ以テ書ヲ招之贈ニ金皿一車ヲ固ク辞ス秦王ノ曰ク公カ之心如ニ山岳ノ雖ニ積ニ金ヲ至ルトモ斗ニ豈能移ンヤ之　秦王者謂太宗也隠太子者太宗兄建成也

名利につかはれて、しづかなるいとまなく、一生をくるしむるこそおろかなれ。財おほければ身をまもるにまどし。害をかひ、累をまねくなかだちなり。身の後には金をして北斗をささふとも、人のためにぞわづらはるべき。おろかなる人の目をよろこばしむるたのしみ、又あぢきなし。大きなる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、心あらん人はうたておろかなりとぞ見るべき。金は山にすて、玉は淵になぐべし。利にまどふは

金は山にすて　荘子天地篇ニ蔵ニ金ヲ於山ニ蔵ニ珠ヲ於淵ニ不レ利トセ貨財ヲ不レ近ケ貴富ニ不レ楽マ寿ヲ不レ哀マ夭ヲ不レ栄トセ通ヲ不レ醜トセ窮ヲ　文選東都賦ニ捐テ金ヲ於山ニ沈ム珠ヲ於淵ニ　同第三ニ蔵ニ金ヲ於山ニ擿ツ璧ヲ於谷ニ　註ニ云ク擿ハ側撃也

うつもれ任名
遺文三十軸軸々ニ金玉ノ声アリ 白氏文集ニ
竜門原上ノ土ニ埋テ骨ヲ不埋名ヲ
おろくよつてうちさんで
父祖の諺り こうこく不肖
のりはゝ本位よのかくこし
おりむりしそなをさえて後よ
賢文と用ゝ後世ニを家よ
なられすくを例とみすもと
在なとゝ云善政よわしもと
賢人聖人らつりとろりしさ位
よいとろし
孟子萬章ノ下篇ニ為レ貧者ハ
辞シ尊ヲ居リ卑ニ辞シ富ヲ居ル貧ニ辞シ
尊ヲ居リ卑ニ辞シ富ヲ居ルハ貧ニ悪カ乎
宜乎抱キ関ヲ撃ツ柝ヲ孔子嘗テ
為リ委吏ト矣嘗テ為ル乗田ト矣
人のかをとゝろこうよ
荘子逍遥遊ニ曰ク挙テ世ヲ而誉レ之ヲ
而不加レ勧 挙テ世ヲ而非レ之ヲ而不沮

もくれくいとふうつかろんこ。
うつもれぬ名残かつ後世
におさんこそおのこかり
かう人これ佳ころく聖人と
なれそしともとそれなる
人とやいふべき。そうらり
つさるる人ゝ恵よ生れ
時よあへいさきつき佳よのか
里おそらとさらむちを
きぴやうしうり賢人

加ヘ沮ヲ定ム乎内外之分ヲ弁ス乎
栄辱之境ヲ
参ハ又そしつしのゆしろわ
韓退之送李愿ヲ序ニ與其誉ハ
於前ニ孰若無毀於其後ニ與ハ
其楽於身ニ孰若無憂於
其心ニ
かのほうえ
通鑑ニ魏主叡カ曰ク選ニ挙テ取
有名ヲ如画地ニ作餅ノ不可
啖也 晋書ニ張翰カ曰ク使ム
我ヲ有身後ノ名不如即時一
盃酒ニ
智恵ひいてゝいはあつて
老子ニ曰ク大道廃テ有仁義智
恵出テ有大偽 王分甫カ註ニ曰
智者知也恵者察也以其ノ
有知有ル察此ノ人偽所以生ル
也息斎カ註ニ曰ク不幸ニシテ而又
有ニ小智小恵ノ者

聖人こうつら名ししきさ佳
よとつぱらおぼくして
やとめあか又行傾しぴ
とへよたうさつゝさ佳を
のそむをせやよおとろうえ。
知色てとこうそ。世よ
とゝまきくかはれを
あさまわうる很。つうく
ゝいはまれと悪さうう
いへ乃こ很よろこつて之

竊ニ仁義ヲ而行之則ハ僞自此
滋ク乱自此始ル　又老子ニ曰ク絶チ
聖ヲ棄テ智ヲ
はむかなへしかなへとよ
世よそくおうれつくへさらん
人みてすこしやられさるべし。
煩悩　大智度論ニ曰ク煩悩ハ者
能ク令ム心ヲ煩作悩ヲ故ニ名ク煩悩ト
又曰ク属スル嗔ニ属スル婬ニ属スル癡ニ是ヲ
名ク煩悩ト　大蔵一覧ニ詳
是非とうそうちはよろ忘う
可不可も一條也　荘子斉
物論ニ曰ク方ニ可ナレハ方ニ不可ナリ
方ニ不可ナレハ方ニ可ナリ　又曰可ヲ
乎可ヲ不可ヲ乎不可ヲ物固ニ
有リ所ノ然物固ニ有リ所可ナル無シ
物トシテ不ト云コト然無シ物トシテ不ト云コト可故ニ道
通シテ為ル一　是善悪是非可
不可然不然曲直邪正一切
世間の也偏を離るるの云
あるし
まうんとは称らんやま
まいはそもしのやうに。
身の後の名おらそをう
はまりさるも。是を称
何とも善とても　天台の善
悪不二六祖の不思善不思
悪とも　あるれ通ずべし
うるいはよとろそる事。
こしれあるく知ら候

むかしの人は　真人以之
道遙遊ニ曰至人ハ無己神人ハ
無功聖人ハ無名　梁武帝
建寺度僧ヲ達磨曰ク無
功徳
名利の悪とりともかな　發
端の初よ應映せつし
名利をとしりの要の二字
衍文也　荘子盗跖篇ニ與ニ
名ヲ就名ニ云て下のるり
非ス以テ要ニ名誉ヲ也とあり
要の字よ假名つきそうると合
て誤つてまきうるえ
ととめ賢と称りかなへ
のさよいもく智をむし
いそへのけらてしつて。
あ能ハ煩悩の增ませ
なるこつてへくさくうむし
てあなハ菌くとの智う
ほしとはらなかとう智
とりへさ不不下ハ一條之はらなかとは善といふ
むかしの人ハ智もなく徳もなく功もなく名
なうし是れ知らまうつうへん。是徳とうしぞ

あさましきハあそびなり。中よりも嬰児のさ
ひはひさかれハ人の海とびのく床ちて名利の
要とも思ふにかくのまし。前にすハ是れな
りけるよしをも称へよふかしまた
法然上人ハ源空也。姓ハ漆間氏。美作国稲岡也 我人法然上人に念仏の
時称ありよをうされ。ぐうとなをとうち給ふ。
いろしてこのさうことやめゆかんとや まことハ
目のさめらん程念仏しれへども又念仏らる
ものいとうかりけるとぞ。又法然上人ハ一定と思へ
ハ一定不定と思へハ不定なといはれたり。あまて

ぐうらし。又うたゝびまうしも念仏をれハ往生し
とこいはれたり。是も又ようとし
ひとらりまれと
よいと詠んけるよひとうりく 浄土宗 閑憺酒に。経の人皮とるや
あとくおもて
粟とのとらひく 是ハ此家云すのれむしとめがくちよ
とあるハ於之京六条町ニ行 老
尼あり常に大豆と含て定 しとうて。人あまるい
に来るとくすくの衣へゆけハ ひとうりされとしばしす
豆腐と煮てくらせたると
人ごとに豆淡してそのひとふ めさく粟とのとらひて定。
又併豆ぶこ路に我人の
ひとめあるも五穀とくらす によものくさひとくハさ
くり菓とのとらひろうて
まハ我人に嗽しせろうん ありされハがくまうやうの
宮の人にあへさたおもと

とておやゆるさくつきとかり
〳〵月〳〵日契のつくへる
くゝる　競馬とらく
世のちまての　後漢帝本より
ちまとりの〳〵おかとせん　契るは
ちまりのるとはさんりのたむし
いふうとし　万葉世間之愚
人之吾妹見爾おかろいぬ兼之
とみ給つゝしみ東のおのよ。
新人多くそくめんしさると
しうれ共おりてうらのさかたよりされとよ。
人おほくうらこみ〳〵る人めへさやうのつしかく
おれつとよ〳〵ひたすらあふち乃本よは師のかた
まとくおのまさよつゐかくおもかなはもせらりれ
さあつゝくら給ありくおらあへさ時よ聞を
さ滅もとう覆こえ見と見んとへおさそうあきみ

て世のちまつりのうなかくおやうこさ枝のつくへりして
やもうれんあつまく給おなう人よなとつかよ我いよ
ふとうひりまた。しかれつゝ生死のあ来只今よ
もやはん。それをきたくおおんくしはくてれさわ
うなおうつは我がさきやとおぼえとぞめくまこへお
なおへとも。巡りさたにこそいふれむとてかなはぬ
ひゝく皆うしろを見んとへいつせいでて
恋さうちくまひへゆのまさしくのことうち。
なりくいかひようさん人されて
とも。おりつく乃いかひのわね
人木石にあらねば
曰ク心非ス木石ニ豈ニ忘レン深息ヲ　遊仙窟ニ
白氏文集曰人非木石皆有情
不如不遇傾城色ニ　住あり

物語にいへしわたくしあつまりて
めとらくいふす月日つく
をりいでし木まじはるる心
くるしやうひさん

ちして胸にあたりけるに
や人木石(ぼくせき)にあらねば
時にとりて物に感ずる
事なきにあらず

唐橋　村上源氏久我(こが)の庶流
也
教相　真言宗に経論聖教
を学を教相といふ事相とは
修行するを事相といふ
気のあがる　源氏若菜下
まけのわづらひめぐるやまひ
うちおほひければ　眉額など
それより目のうへにおほひ
二の舞乃わのそて　伶人乃
舞の面之文和くしてれ
おそろしき面之安摩とく

唐橋(からはし)中将と云人の子に
行雅(ぎやうが)僧都とて教相(けうさう)の
人の師する僧ありけり。
気(き)のあがる病(やまひ)ありて年
のやうやくたくるほどに
はなの中ふたがりて

おそろしき面也安摩とくおほし
き舞あり次に舞を二
の舞と云之
鬼のかほよるつく　秀祐抄
語にの云馮大異か鬼
穴にいく鬼のかほり
かほして久つまき八里人
とらおそまつく近はうこゑ
しはひ合をゐる

いきも出がたかりければ
さまざまにつくろひけれど
わづらはしくなりて目(め)眉(まゆ)
額(ひたい)なども腫(はれ)まどひて
うちおほひければ物もみえず

二の舞の面のやうにみえけるがたゞおそろし
く鬼のかほになりて目はいたゞきのかたにつき
額(ひたい)のほど鼻になりなどしてのちは坊(ばう)のうちの人にも
みえずこもりゐて年久しくありてなほわづらは
しくなりて死ににけりかゝるやまひもある事

みつそあつまりをれ

えんなる 艶のよくしやひやう

とよあつき 春風艶陽の貴の字

花見さくしうてうくと 有花使

入門主人ハ莫問誰

白氏文集 遥ニ見テ人家ヲ花アレハ

便チ入ル不論貴賤ト与親疎

風流つるのとやうなり

えんなるかたへはとやりぬ

あれのゆくふつくあそびちぬ

ありくさせよりかと志かりまつるかな。花かんむりくし

かつさと。さしいりさくをれは。宛転のかうしみかな

おろしてさひしきりかよ茶よむさて很まて

のまれゆとよあきつるかな。みとの居されから金

からつきよけめれとこの牽牛りうりやくら

ときとつまとと。かすよそてのとやうなすかさ海して。机

のくへは文とはそりひろまくて人わきちかはりかな

人ありくんとるよはさく歯かりし

はやくうねり 移衣はこききうゆき 濃紫 あやしき乃衍乃あきまの

濃紅のえうろき装束よし ちらいつときうえ男氏

さしぬきハ紫色也 月影よ文あひさくさくか

ゆへつきぶる 似合さるあ美く らねし。はやくうたうら

さやくれう かをやくたちひさき きぬよおれさしぬきい

入源氏帚木 たしきやかよ とゆへつきてかさ歯そて。

てふうしり さくやうなるよしいひら

河海よ 細ニ諦 妙し とあらしてそろちかりよ男

あきしの事よそかちて

そわらぬわらて人古今よ

なしきの裏よそかちて

らうひきとこのさるのあうらん

えるうしもそ えもいとすすお

うしろつさ美く

ふうさすさむ よすさことに

もろこしの執之文吹やむ義も
おなし文すさひよまちとなと
らむしとのあ義なるへし
榻 和名集榻和之床也車
とすゑをくとくをのえそう
さのやうなりをかの之
女房のとひかせまうりなと
きうへ月さとも見えとひ風ハさ
さ袖の匂ひ
ようちそうひさまへるをひう 源氏末摘
思てもさハなるまくかの里
人もたとろさ也へし

中ゆ何そみちを揺る気
の露よそれちりてなけ
ヤ。笛をえたしも吹
まさひるか。哀にこゝく
ちる人さへおしと京
よゆんとてまつまく
て見をりゆくゆきをし。
御さきやそぶふうさりた惣門のあるちよ
入ぬ。榻なるそふ車のうちもつゆちり月
こまかんとて下人をまへへ参りくの露のおり

海もとゆく所々の花もちりやとらぬ雲の
うくよ法師ともさりそとら梨壺の風よさそそ
つきくるか。晃たき地の匂ひもうかしむらちを。
震殿もうち梨壺の扉よ色ふ女房の出風うるへ
ちとへめる花の車とといふれ忌ひまうらん
のまくよ出かれ秋の腰へいとれあまなな露よ
生の花ちこともくまてく
かたとまり 源氏幻巻よ
まくしおろさゝそすまの月を
くとうましきむしの声なを
又知ろふんまさとりくえゝと
つけ乃花下よらきしくれな
へし

もへ雲の随来もやさ
そとのとやうぬると秋の花
とゝ申しく。やっしとの
何されくるくもゝしのもう

ゐらしても月のそれ〳〵をも
しと定めらし
云世の二條の女とをよ。良経
兄僧正とやすしハ。さハ

云世　閑院乃末流第一流乃家也
せうと　兄也又兄弟姉妹をも云背夫ともいへり

めくり勝あしらへなるらし。坊のこゝろ八人さ
なる樓の木のまとなれハ。人樓の木の僧正とそ
いひならハし名給ふへらんもよく樓本にされよ
なりにと根の上るれハ。ぶらしく井乃僧正とハ
里にもよく〳〵あらしくぶらしく井とかいそく
いふもなれハ。申も法師ならさりけり〳〵れ

浮世の僧正とうつひなるを
柳原乃亀よ強盛法師と号まなりけり。
なくと強盛よりおもひなる少人名をしつまよりなり
とそ

さるのことなり
ますらおかのかとのまあれ
とちひあとくりとまあんと
古今よ　万葉よ
載人清水へ来りけるよ。
巻くかる居の中さつまさ
里ひかなる道とりくさめ

毛詩邶風終風篇ニ寤言不寐願言則嚔註ニ曰我甚憂悼而不能寐汝思我心如是我則嚔今俗人嚔云人道我此古之遺語也
瑣碎録ニ曰ク白ク嚔ヲ子日酒食卯日ハ大吉

出くゆんへとさうへまかと
さらりのさまよくかしひぬる
くもひりてゆさかされ。
居ゆおあ何とふくへのき
ませことちひなれまと。

辰日ハ婚合牛日喜事酉日客至戌日嫉恚亥日君子思ヲ餘ハ皆
出漢書藝文志　嚔ハ耳鳴也　雜占十六巻ニ師古曰嚔ハ音丁
計ノ反　李濟翁カ資暇集ニ
今ノ人毎ニ嚔必自祝スル所ノ祈ルト云云
案ニ邶ノ終風ノ篇ノ註ニ願ハ猶ハ思也
言ハ猶我也蓋佗人思我ニ則
嚔ル之也鄭又秘古遺語毎
嚔ル云ク人道ト我ヲ以為ク他人ノ説ク
我ヲ我則嚔ル此正ニ得タリ其願言ヲ
者非ス呪願之願ニ非ス語之言ニ
今ハ則自祝ス乃由ル誤解ニ詩句ヲ
尓ニ容齊隨筆第四ニ曰ク今
人噴嚔不止者必嘆唾ヲ祝曰
有人説ク我ヲ婦人尤甚ニ云云嚔
音帝鼻氣ナリ
定ム其ノ禁厭之法ヲ　日本記第一ニ

光親卿　東鑑二十五承久
三年七月十二日按察卿ハ光親
光親去月出家法名西親
者為ニ武田ノ五郎ト
信光之預ニ下向而鎌倉ノ使
相逢テ于駿河ノ國車返ノ邊ニ依テ触ニ
可誅之由ヲ於加古坂ニ梟首ス記
時ニ年四十六云云
衡重とも筑重
老来ハ
朱文公勧学ノ文ニ勿謂今日不学

学而有ト來日勿ト謂今年不ト学
学而有ト來年日月逝矣歳
不我延嗚呼老矣是誰ガ之
愆
ふゝれ塚　李卓吾浄土決ニ曰
古人ノ句ニ曰ク莫待ト老來ヲ方ニ
学ヲ道ヲ古墳盡ク是少年ノ人
待ト老來ノ始ニ莫ト学ト道ヲ古墳多ハ
是少年人
荘子蘧伯玉行年六十ニ而知ニ
五十九年之非ヲ淵明帰去來
辞ニ学ヲ今是而昨非ヲ

弥すゝんとまつことなかれ。
ふゝれ塚背くハこき
お年の人くゞりさるよ
病ぞうをくぞちまちよ
此世ハさうんとよるな附
あゝそぞしめくゑめる
ゑのあやまれおことえ
まいれあそのやまれおほ
らおりまじおやまわまことい
迷まもへさことをゆゝくしゆく人さことを
いそれくとおしこのるやしさくぞ附ろあさ

うひおとんやゝ人かゝて云ゝ之のかよせまろめゝくとそ
くよるゝしとうまくつゝのまさいかうまるしさや。
ほりのまを　新古今よ
きおゆくさとりのかくつゝのまも
言まもそて勢まいてもろゝをもとそもち
八千おゝよつ此ほかハよくへし学
つるゝく小らあはしくゑりし
神の兄く小康の角の乗の
弓ハ兼の影く角をせるゝ附
一本もろてはるしうさ云
夜月まつのをせもろある
ゑおをゆくとしまあつて
禅林の十因　禅林八寺の見之其ハ永観
東山永觀堂ろろ
律師の作まりて往生十因
一巻あつて一廣大善根故二
衆罪消滅ノ故三宿縁深厚ノ
故四光明攝取故五聖衆護
ひとゆあやまうさうん。
ももそくはるとそてもろ
さゝゝはずしゝ無世のふるき
のまさいかとうまりしさや。
ゆきくゞ仏の衆まるしまくいかゝ
附ろゝへくいゝく今まなき
のるゝわるまくぞぐへよる
久よせまれつてさゝく身を

持故六摂楽他生故七三業
相應故八三昧発得故九法
身同躰故十随順本願故
心戒　或曰心海抄新後撰九よ
ん海上人一念不生をよめる
なき世をなむともなさきの〔?〕
ちかとふりよきさちしゅえん
いのちとハいふなくのれしむらん
ききみハいけるみそつくられ
あるへのいくく心海上人ハ泉涌
寺の正法國師の弟子なりと
云く
日十八日心海上人
應長
花園院の年号之
かくのかたり　つれくのれ
てきなりける叹のてなとも将
のなかともさき浄国初院了
かくつきくりとおつて

かくさく念仏してつみよ
浄土をとしきたるしと。禅林
の十因よ浄らも心戒とい
ひなるハおまるよ此世の
ならそめけるよ法をひく。
ちつれついかけることはなく。
つねハすくまるくのよそ
まくなる
應長の比浄国より女
の跡よるくくる代あく

のかたりもとふしあるらく。それ廿日をとうきく。
同しくは京白川の人鬼見たよとくく出るとふ所ハ
西園寺まゐりしふなハ院へまかる鬼ぞ見たと
いふそくへみなとひあつ集さしく見てけるとふ
人もなく空ことを人も言し。下人鬼のことの
ひやまは此東山より安居院なるへまかり侍ふ。
四条わかくさ雨の人皆北へ流さしてなける。一条室
町よ鬼ありと由しりとおへつき今出川のかたよう
よろしみやまきハ院の御桟敷のあたりと文よそとつき
院のれ桟敷　一條大路乃ある
よありつうか代に代のれ地の　うへうもあつし浅立出とさり。

用ゐるの桜花とも
そやくハ八重おほよりもちらさ
そうらんえ

やく跡なきことにはあら
ざめりとて人をやりて見するに
おほかたあへる者なし。くるゝまでかく
たちさはぎて。はてハ闘諍おこりて
あさましきことゞもありけり。そのころ
おしなべて二三日人のわづらふ
ことの侍りしをぞかの鬼のそらごとは
このしるしをしめすなりけりといふ
人も侍りし

亀山殿
亀山院後嵯峨の亀山の御隠
居所なり。これを亀山殿とも申
なりとさう也 亀山殿とも御所ともいふ
[illegible]

亀山殿の
御池に大井川
の水をまかせられんとて
大井の土民に仰せて水車

土民 あやしの民也。
水車 東坡集十三無錫道中ニ賦ス水車ヲ詩
翻々聯々トシテ銜尾ノ鴉、犖确ク蛻骨ノ蛇
分ツ畦ヲ翠浪走リ雲陣ヲ刺ス水ヲ緑鍼抽ク稲芽ヲ
註ニ曰ク汗沍間人目ケテ水車ヲ為ス童骨車ト
水車のかたち八間へ[illegible]
[illegible]
[illegible]
王氏ヵ農書ニ詳之

をつくらせられけり。おほく
のあしを給ひて。数日にいとなみ
いだしてかけたりけるに。大かた
めぐらざりければとかくなほし
けれども。つゐにまはらで
いたづらにたてりけり。さて
うぢの里人をめしてこしらへさせられ
ければやすらかにゆひてまゐらせ
たりけるが。思ふやうにめぐりて

よろづにその道をしれるものハやんごとなき
ものなり

仁和寺 寛平法皇の御庵室あるによりかくいふとかや

仁和寺にある法師年よる

石清水 貞観年中に和州大安寺の僧行教筑紫宇佐八幡に参りし時大菩薩示していはく我王城に近くうつりて天子を護らんとのたまふ行教夢さめてかしこくおぼえて其所をもとむるに山崎にいたりて見れバ東南男山の峯に大なる光あり行教則奏聞して勅使とゝもに宇佐をうつし此所に勧請ありし 神皇正統紀公事根源元亨釈書などにみえたり

まで石清水をおがまざりければ

こゝろうくおぼえて或

かちよりまうで 徒歩よりなり

時おもひたちてたゞひとり

極楽寺 八幡宮護国寺ノ別当安宗開山也縁起ニ云大安寺伝燈大法師位安宗謹言御

かちよりまうでけり。

藍壺院号シテ曰極楽寺ト 在山城国

極楽寺高良などををがみてかばかりと

こゝろえてかへりにけり。さてかたへの

人にあひて年ごろおもひつることはたし

侍りぬ。きゝしにもすぎてたふとく

こそおはしけれ。そもまいりたる人ごとに

山へのぼりしは。何事かありけんゆか

しかりしかど。神へまいるこそ本意なれとおもひて

石清水八幡宮ノ縁起ニ云 右件ノ寺ハ奉シ為石清水八幡大菩薩三所ノ君達梵天帝釈天神地祇并天師僧父母六親眷属ニ有情有識無識皆悉為シ令往生極楽浄土ニ以テ去ル元慶漆年ニ始テ所建立スル也云云 安宗ハ者行教ニ伸尚ノ弟子也

高良 武内宿祢也日本紀ニ天武二年二月八日高良ノ託宣ニ誉田天皇ノ御宇為農香武略之健将又公卿補任ニ曰武内ノ神大臣ハ孝元天皇五世孫也在官二百四十四年春秋二百九十五年但薨年月日人不知之或曰仁徳天皇五十五年丁卯薨ス

或説かうら かうらあり 玉垂宮也

てんまくハみもとらそひろるか。きくしのすみも
先達ハあらきわしくさしおろし
〽気もたかるの法師。喜撰乃法師よりきんとまか
みおとく名あるやうすなかりよ。讃て無み入
はまりぐくつりかなるあしらるへきとりまし次よ
おしらく　鼎乃ことよめりうさきましハ派まるやう
和名集 說文ニ曰三足兩耳和五味ノ寶器也　みもとなどと鼻とつうし
世俗よりよもぢちちへの総之　ひしめく派とさき花
拾遺よ
はのえ乃ちふハまくちりよつる貝
おもうちへりちえそえ見えて鼎出るかよ。灑斉
うちすて　羹のみをとなる
欽鼎もとなるく　よつなしくあてろしなし。

されしかるそくばめらんとするかよ。方められよ海。
塩ともらく。いろくハせんと海よひろしとらくもと
きハひのすりしとりもく。血てるしく。腕よされ
みらくのきとはまるしされハぞらへと云れ。
たやもくられどひくくへくさるしされハか
つくもへこさやうなくて三。あしなるはのくらみ。
かさひとうちまえく。旅ひのさ枝とはかせて。
氣なかくをしのうきねく多ろくまとりう
人乃あやしとかなしとかなるあし。法師の
らとふまのあてくぶしひねつらきえんまと夜。

さてそこもやう〳〵たるに。それいつもとくとうと参
くすりの 神代巻に溟涬(メイカウ)と云 よりいくさ〳〵やまとうた
ふみの道之
文字と 醫書とあり しか文字も見えてさとつくへ
ふかきとしへもるしたえへしぞ紅粉るへ段ひとく。
あつしさちある母るし。桃りことまるぬ
海ありし 桃之桃りしと云 てあるへかたへしわたし。うつ入
うきさいのち 辛苦の至之
らんとも覚しもかかる貌我ものいたくした
とひ耳をなかせそされはすとし。命のいりいなて
うつさはれんでかとそそくりかへしぬこれ
あへとまつるとまさし入るの国を通ふぞも

ちさるへつらひさらに耳鼻なをうきとちるう
ぬうまたうる也。かうし命をりうけて思さしく居を
ねくるものあり
此室(ひろ)よいつらしき呪文のまくるあるとぞいつくさそひ
出しくおそうんとくむし法師ともいふすそ絶たり
からはそひ法師ともかくしかく風流の様子とう
風流のさらりとしやうのその
ぬまうとを続へしやさしきのの和合たよりいとちすと出そ。
く精粉とも拍子ともいふ 絵風情なり和にあつかめ
飲合さと入る是之
和名日櫟子今俗所謂拍子
是也以餉送人也 入くるへひの思う侯よ
なくひの思 仁和寺にあつて
そくのし 嵯峨の子ん たのみよろしくとさそそおちく

ちらしうもなくて。ぬさ海にして。山水へ来
つもくぢらにしぞそくのしいくみうろむぢしまし
らひくぐこくかりしにあるひめくわたくしまつるこきを
のむしろよなきねくく。いくさてこそしきこれ。
いへることうしきよき　あはれ紅葉の錦もみなへて
いへるハ甚とも傷とも痛とも　うへ。源氏あはん浮くらぬ
万葉集によりけり
源氏須磨にいへることし
よそれハ紅葉によるハ困　つくみてまてまるとも
乃子なりへしこそひまそえ
てこるよいかへて　しろひくつにはつの
江家からなん　白氏文集林
間ニ煖テ酒ヲ焼キ紅葉ヲ石上ニ題シ　りにもちく。ね綴とし
詩ヲ掃フ緑苔ヲ
いひあらひく　豁よいはむ　とうつやいとしくしいを
てふてうまひくことくしく

わすれてさくらく　米也米食ゑ　ひ出ありして。ひしろくふう
山をあそれとも　まひく。ゐ
鳥すとの命ぞりしもるえ
文字おのよ
ちつこえかれね事しあらから　またて。ほやくおもみえて
さこひあささかみのところよ
とわのたくひあるにやとくぢにぬれそなくい山を
あされくもあうりなるしらつこけあなくの見えとて。
山水へまうでこへるさまよ。めでとめきなうらそうぞ。は
師走ものしなくして。そうふくいきそうひ。暇くら
てうつりよそり。ほまるもよ魚翁なんとするよへ。
かくしきとあいあさこともの所あるも
うとむしける業へし
詩ニ焚屋炎蒸不可居高夫ノ　楊誠斎
家の造りやうハ。夏をむ

爽気も亦全く無し

ませてゆくし。光はいつか
ありしもやすく。おのづから
まうて河原はへりくだりしかれば。ありてもあらまほしく
ありしけるそてありけるか。あるからましてし。
この御ありしかりは郭のをかしきあり
りし。大弁はたりけれは家をしほりし定家
造作も用あるにあらず。

莊子曰。知無用而始可與言用矣。地非不廣且大也。人之所用容足耳。然則廁足而墊之致黄泉。人尚有用乎。惠子曰無用。莊子曰然則無用之為用亦明矣。

あるは定家つくりかたのさまはしもあらまし
おもしろくしこころの月は
ともそうくようしこその
さるあわひ侍し

久しくへてしくもあらめ人への気方よりあり
ことねしておもひしあくがれしつくるそてはのか
これへとくしうかるあかるへしほとへくるまね
あらしうぬるへつきこ夜の人はおもしろき夜まま
あるさ夜　轄の字まあり出しとそれもとまけりす
又白記もとふりかうもそれの
とくいれさつきさあへさも。
つきもつきさあへとも　二條院讃岐
のうたに
うち海の浪の近江の波のしかもそのしめの大空の人
いのちもつきさゝかしも分もれこそかへらまの
ような人へ来てもうち　ことの袖ぬるもすかるへあまり
八曲礼の讒言をもちとも申されさとれとひらむせさ
勦説ともとしもうかれ雷同をとあらはさ
あらうかれとなつるとみてといみとそのいつく
もらさかなるし

らうがはしき　源氏夕霧にみだりがはしき　乱りがはしき之　ことばしきもちゐ侍りてとあり

まくにこそあれ。かりはゞ人は非をしらずしてわするゝの
中より出て。かならずものゝあはれをしるなるべし
おもひしらぬひとのしおもひとられ侍らしき
るをとひくも。いかにかあらん世をすつるすと
ひくも[illegible]かくれあそびの心ありて人
ことのみ後の世のしあはせのさかりをもとめて
そらめなるにもその身をおもひしらず
とはり
人のまことに出家のみちにいりなばさらにうちなくてこそ。

あるはけれど。とにかくにしも道あらん人はいかにもしてと
おもひくはへとも。人ひとりすみはつるかたのおもひき
あらしめぐるくもりてもやまぬあはれさきえかくる
出家の人は須ず年を経ても院々ありき
沙門は院より出家をもつて浮屠の人
は桑下に三宿せずとこそいへ
後漢書にいはく又釈氏る樹下
石上に坐禅をなす事ありといひて
居所をさだめんや
またつくりなすとくあらんや
恵遠法師の時より沙門は不
敬王者不拝父母とて又
かくしいひしより又棄恩
入無為真實報恩者といひ
一子出家九族登天などいふ
偈文あり
あらんあはれの行末おもしてよ
らし。まことにあるも人のまよひ
なりともいかで世をはなるゝ人あ
らんや
まことにつらきそのいはさら
まよひの世にすみ侍らりけ
ければ世をそむきのかるゝをも
生死をも出んとおもふべき所

くさ縁よひかれく

心地観経ニ曰心ハ如流水ノ念々ニ生滅ノ於前後世ニ不暫モ住セ故ニ心ハ如大風ノ一刹那ノ間ニ歴方所ヲ故ニ心ハ如猿猴ノ遊ブ五欲ノ樹ニ故ニ心ハ如衆我ノ愛燈色ヲ故ニ心ハ如野鹿ノ逐フ假聲ヲ故ニ心ハ随テ萬境ニ轉スル所貫ニ能幽ナリ

本生 無あまたくる[illegible]
ゆく人あとをそりみるいつまて
の[illegible]しかんむ縁ま
ひかれいくうつかとのされ
は[illegible]もしそへ[illegible]し

かくしてこころおもひしの人よなかれ[illegible]
色縁と聴聞とをくぐまする[illegible]あまりて[illegible]
[illegible]のつゆ世みむさけるにかはるるも從よりなれ
なとかなかんぱま一念そをむかうひ近さかりなれ
[illegible]をもしおすといせん筆此はこされほ一夜こそ

みそく世みいをちんへ[illegible]ひとゝなりても[illegible]
まへの貪欲なまされんへかく紙の衾あさ
貪欲をいはく 法花經ニ諸苦ノ所因ハ貪欲ヲ為ス本ト若シ滅ハ貪欲ヲ無シ所依止の衣一鉢乃まとあさ
目貪欲ヲ
所依此ニ
紙の衾 乃ありぬつくそく人の[illegible]
一所のまうき 事文類聚前集僧問守清禪師如何是和尚家風曰一餅一蒸一鉢到所是天涯 人をちさせんとしおかさ
やまとくさかそくるとね
あさきのありとの 衾銘 藜藿之羹 范堯夫布衾 緼布之温 為し飛よそろかもあれ
[illegible]之尊 [illegible]義之尊 六翮ニ鹿裘禦寒ヲ布衣掩形 へかんなしあまへこく[illegible]
粱之飯藜藿之羹 [illegible]ちうけくとのこされ
いさへとまさうんあるしにへやかりて世の

のがれんこともおもはかりしかれば、ひとへにむかしがが
るはつとめてくわうゐんはつかさんばよその
ちくるいよう〳〵なるわかましや
大事とふのさん。 法花経方便品ニ世尊ハ唯以テ一大事因縁ヲ故ニ出現ス於世ニ
大事とはぶつてんへのさとりくらんこと
のがれたひとゝもまれしてぞあかりしすくへこゝえんし
はかるそくおなしくは法のにさかしうゝそえんへ
くるしびんみ蚊やひかん法楽頭くるくとめ
たくさん事ともはまヘこそはましここてましん
わかれしあさかりしりてぬやうにあるとなんまる。

えさいぬよのくやくめさえかく、よのつうゝなるき
をなくおもひえりとあるへのとれ。おれやうへとなれる。
おどろしあかさう、皆はしわしまはしくそ。しれ、ところに
めかよろきくたるよしふよろへは、ちりしよやうふ。男と
あとえんとするきは恥ともくうしみと賊ともに持
てのかれさるそうし。命の人とまれかのへ、無常乃
らえへのせむなりわと 孟子ニ きくろことへいな大の義よ
豈ニ有ン他哉避ルカ水火ヲ也 如シ水益深カ 如ク火ノ益熱カ
つしも速よのかれかくれ
老くろおやいとをこうさとしこ
花山院年十九にてせうよ
时悲花経妻子珍寶及ヒ王位 ものともに内聖かなる親は
臨ニテ命終時ニ不随者とあるを ところいまへ、このおもふへ

れ給ひてひそかに信とのゝ
連歌あそばしのみとなん

乃情拾りこしくてすて
にんや
眞乗院(しんじやうゐん)に盛親(せいしん)僧都と
く。色んしとうき智者あり

志茶坊　仁和寺よりのぼる
いもかしら　芋頭ともいふ芋魁
ともいふなり

まぎらかり。そのいもかしらといふものを。このみて多く
ひとり談義(だんぎ)の座にても。大鉢にうつたかく
もりてひざもとにおきつゝ。くひながら文
をもよみけり。わづらふことあるには七日二七日など。
療治(れうぢ)とてこもりゐて。おもふやうに。よき芋(も)かしら
をえらびてことに多く食ひて。よろづの病をいやし

けり。人にくはすることなし。たゞひとりのみぞくひける
きはめてまづしかりける。師匠(ししやう)死にさまに。銭
二百貫と坊ひとつをゆづりたりけるを。坊を百
おし　銭と粗芋と云々
貫に売りて。かれこれ三万
疋をいもかしらのあしと定めて。京なる人にあづ
けおきて。十貫づゝとりよせて。芋(いも)かしらを乏(とも)しからず
めしけるほどに。又こと用にもちゆる
ことなくて。そのあし皆になりにけり。三百貫の物
をまづしき身にまうけて。かくはからひける。まことに
ありがたき道心者(だうしんじや)なりとぞ人申しける。

或法師と見えて。さうりはきたるものゝなかを行
ことくなれども法師そとへのこしひきまくしいでさふ地
衣ハ法師そ法師そとゑ云義也　さうらふとしハ。と親やさうし候ひしかハ。しまゝ
しられば法師のうしろ世にんとそのひろき法師部
こめられくぢらし法りく。大会のゝく。紙さ云中大弁
説人とりもくまつくくぢの法號をまきいへる中
法燈　仏所傳所なりと云義也　仏法を燈にたとへて云　かもおほくさうまうすを
まへ九。世にありぬくさうひょうなくせきのかく。万月
中かしく。大かたくへはさうらかくいかくあすし。出
仕して。蒼膳なくれはく時もかんなへのおみすへ。

こゝろをとゆらばしかおほきへわけまいらでくひとすり
うちそひくゆりたるまハ。ひとつひとくでゆきたらり
仏經　仏家の法よ一会ありて日中とよくハ地をとくりて或一人の法縁あり一経の説終りて云々のまいハ仏中にして唄よくりし光を非時と云やふ様よ見へしうり　とれ非時よ人よひとしく定てくりよとひとされ時節かふと曉よくひとく称する
まき一ハ堅きりけとりていかなる大さすわかしまくへ
ふさりきとくいまで同さあわまいいつく我といつど
ん僕とせりしてうちかにわりまとかくよまのつる
かられさ彼らたし人とりいひと口まとしよみ川中
これらの娘のいつくまつのきつりしや

御産の時こしきおとす事
幸永御産の時（一云后御産の時）
御殿の棟より甑を墜すこと
ありし皇子御誕生の時ハ南へ落
皇女誕生の時ハ北へ落すと見え
少くれをしるもの稀ハなきされ
と云事しかしおもしろけれとも
〔illegible〕

甑
和名集曰甑 子孕切 唐韻曰
甑 音與勝同 和名古之岐 炊飯器也
御胞衣 神代巻 及至産時先以淡路洲為胞 とあるにより胞衣
どゑなとよめるものありまた
わうさい皇后の御事 儒書 仏書
図絵日本の記録歌書等にかきつ
と縄との〔illegible〕とおさむるとみえ
花と云字治の〔illegible〕蓮花王院
の〔illegible〕東大寺の御〔illegible〕の数

御産の時こしきおとし
まつりけるはさうこそおのれよ
まゐらせし御胞衣をとこ
御はらの時のまゐり〔illegible〕
と云事せられ〔illegible〕
ありし下さ〔illegible〕なりそ
きせ給ひ〔illegible〕大宮の
皇の〔illegible〕
あやしき〔illegible〕の御〔illegible〕
やしきへのまうでなか

延政門院　後嵯峨院の皇女之
こゝろすこしいうしのつのもし
とくなりしくゆへとをし
かたつひまにこひしくこうくとい
つとは時ハさきさいますとく
なかきさるすやたとひ御房あり
とそも幼少の姫宮よませ給ふ
とうきハすこしもうかり
さと明魏法師ハもとくよみなせ
しつひとやうきとく心をそれ
にたのもふなひとつよせ之し
と云つも

あはれしきおもしろくおほえ
きこえし
延政門院いときなくおはしまし
ましける時院へまゐる人に
御ことつてとて申させ給ひ
ける歌
ふたつもしうしのつのもし
すくなもしゆかみもしとそ
君はおもほゆる
とある

日本政府図書
文政戊寅

国立公文書館
National Archives of Japan